

# クンブレックとネズチョークの冒険 ～失われた宝を持ち主に戻す者たち

## 第1章 ネズチョークとの出会い

ある夏。心地よい森のはずれ方、パウチーハ川がゆったりと流れるあたり。正体不明の生き物が茂みから黒いきれいな鼻を出していた。

その鼻はくんと音を鳴らして慎重にあたりのにおいをかいだ。次にその「森の住人」の顔全体が現れた。その動物は、毛深い眉でしかめ面を作った。顔はハムスター、リス、カピバラといったすべてのげっ歯目をまとめたような顔をしていた。もし人間がこの顔を見たら、すぐに驚きの声を上げるだろう。なぜなら、この動物はネズチョークという、ほとんどの人間が見たことのない、それはそれは珍しい動物であったのだから。

そのネズチョークは前足でメガネの位置を調整していた。そう、本物のメガネ、前に古い櫨の木の下で見つけたヤツだった。これを見つけてからというもの、このネズチョークは自分が村で一番頭がいいヤツなんだと思いはじめていた。もっともそれは事実とは異なっていたのだが。メガネの持ち主は黄色いシャツとオレンジ色のズボンを着ていて、しっぽの先端はまるで大きなフワフワの筆のようであった。名前はフクシクといった。

この動物は、もう一度眉毛をくねらせて、軽やかに松の切り株を登っていった。

興奮した息づかいで「こいつはスゴい！ 見ろよチュポックス」と言うと、草が茂っている方に目を向けた。

フクシクに2匹目のネズチョークが飛びついてきた。同じように明るい色の服を着ていて尻尾がフワフワしている。

2匹のネズチョーク、つまりフクシクとチュポックスは原っぱで休暇を過ごしている人間たちの方を何やら楽しそうに見ていた。より正確に言うところの二匹が見ているのはその中の男の子の手に収められていたプラスチック製のトラックだった。

「あれは車なんかじゃない！ 本物のモンスターだ！」とチュポックスは飛び上がって言った。

「ああ、ああいうのが手に入ったらなあ……見つけた宝物を背負って運ばなくてもすむのに！」フクシクは夢見心地で言った。

その時、2匹のネズチョークの間を女の子が花を踏みつぶしそして太陽の光をさえぎりながら駆けて抜けて行った。2匹は隠れなければいけなくなった。

原っぱには人間が4人いた。それはパパ、ママ、ビクトルという男の子、そしてソフィーと呼ばれている女の子だった。

お父さんは釣りをしていて、お母さんは本を読んでいる。子供たちは自然の中で同じ年頃の子供たちが普通やることをしていた。おもちゃであそぶ、おもちゃを散らかす、森の中を走る、大騒ぎする……こんな具合だ。

ソフィーは自然や動物が大好きな、人懐っこい女の子。そんななので、親に「大きい犬が欲しい、できれば何匹か」とよく言っていた。「せめて2匹、なんだったら6匹でもいいわ」こんな風にも言っていた。一家が住んでいるアパートは狭かったので、犬は1日2回以上の散歩をさせなくては

けなかった。それだけではない、たくさんエサをやったり、毛のお手入れをしたり……毛だけじゃない、あんよも洗わなくちゃいけないし、さらに予防接種だってある。ソフィーは親に「自分でやる」と言っていたが、親は親で誰がそれをやることになるのかをよく知っていた。そこで親たちは、とりあえず、娘には魚とハムスターとオウムを与えてみるということにした。

お母さんは、喜んでいる娘に動物たちを手渡ししながら、「この子たちの面倒を見られるようになったら、犬を飼うのを考えましょう」と言った。

今日人間に連れてこられたのはハムスターだけであつた。オウムは家で留守番だった。ソフィーはペットの入ったカゴを水辺に置いた。

「なんてキレイな景色！ねえ、ホムカちゃん」おんなの子は、ハムスターに向かって大声で言った。ハムスターは「まあね。たしかにね。たぶん」とあまり気乗りしない様子だった。「早く帰りたい……」

ハムスターのホムカは家の中で飼われている動物であり、予測不能でわけが分からない自然の中にいるのは、決してワクワクするようなものではなかった。むしろ、何とも言えない軽い緊張を覚えるものであつた。

ソフィーは「私は遊んでくるから、あなたはここで自然を眺めていてね」と言うと、ウキウキとスキップしはじめて、そして走り出した。ハムスターは目ではソフィーを追いかけて行つたが、やがて一人ぼっちになってしまった。

そして頭の中で「チーズが食べたい」と言っていた。が、そんなものはここにはなかった。動物の夢がすべて叶うわけではないということには慣れっこだったので、しばらく水を眺めていた。が、飽きて仰向けになり、後ろ足でカゴの中の車輪をのんびりと回し始めた。しかし、チーズのことは頭から離れようとしなかった。

正午過ぎ、パパは釣り竿の餌を確認していた。ふと顔を上げると、小さな雲が近づいてきていることに気づいた。そして雨に濡れないように荷造りを始めて街に向かった方がいいだろうと考え始めた。釣りも全然ダメだったことだし。もっとも釣りの結果なんてちっぽけなことだった。でもそれを理由にしてせつかく足を運んだ大自然を後にして町に戻るなんて父親としては失格ではあるが、雨雲の方はというと全然ちっぽけではなく本気モードだった。子供たちもしぶしぶながら「この雲はまあマズそうだな」と納得して、みんなで荷造りを始めた。ビクトルとソフィーはおもちゃをまとめ、親たちは荷物をまとめて車に積み込んだ。

「パパ、僕のトラックが見つからないよ！」男の子は戸惑いながらそう言うと、草むらを探したり、茂みの中を見たりし始めた。

「なくしもの！また？」妹は楽しそうに笑いながら、人形やぬいぐるみを集めていた。

「ちがう、なくしたんじゃない。この辺のどこかに置いたって覚えてるんだ」。しかめ面をしてビクトルはそう答えると、草と草の間が良く見えるようにひざをついてかがんだ。

「その車を隠したのはクンブレックに違いない！」ママは冗談半分にそう言うと、テーブルクロスをしまい始めた。そしてパパにウインクした。

「そうじゃないとすると……ネズチョークかもしれない！」パパも一緒になってママの言いだした話をおもしろおかしくサポートした。パパは雨が降る前にさっさと出発したかったので、熱心にこの話に参加した。

「ネズチョークってだれのこと？」男の子は膝をついて両手で草を押しよけながらつぶやいた。

「ママ、クンブレックってだれのこと？」女の子は、人形についた草の茎を振り払いながら尋ねた。

「ネズチョークは小さな森の住人、普通のハムスターよりも少し大きいんだ。『ネ・ズ・チョ・オ・ク』って呼ばれているんだ。」パパは一文字一文字区切りながら言った。

「それじゃあネズチョークって何をする動物なの？ どこに住んでるの？ どんな見た目をしているの？」男の子はネズチョークに関心を持ったので、車を探すのは一旦やめた。

「ネズチョークは森の中に住んでいる。見たことがある人は少ないけど、リスみたいな尻尾と筆みたいなフカフカの耳を持った動物で、全体的に毛はフワフワしているらしいよ」とパパは答えた。

ママは「ネズチョークは人間がちゃんと片付けなかったモノとか、人間が持っていくのを忘れちゃったモノをぜーんぶ持って行ってしまう。そうやって生きる生き物なのよ」と付け足した。

「ネズチョークは見た目はハムスターとかリスとかに似ていて、ズボンとシャツを着ているんだ。そして人間の言葉と動物の言葉の両方が分かるんだ。すごい生き物だろ」パパは残った食べ物が入ったバスケットを車に入れてボタンとドアを閉めた。

「クンブレックはそしたらどんな生き物なの？」女の子は自分が思った質問をした。

「クンブレックはネズチョークそっくりなんだけど、別の部族から出てきた生き物なんだ。クン・ブ・レックよ」ママはこの動物の名前をもう一度一文字一文字区切って言った。「クンブレックも人の物を盗み、忘れ物や置き忘れた物を拾っていってしまうんだ」

「そしたらネズチョークとかクンブレックはどこで見つけることができるの？」ビクトルはもうおもちゃの車を探すのではなく、両親の話を聞くのに夢中になっていた。

「どこでも見つけられないんだ」パパは答えた。

「どこでも見つけられないってどういうこと？」男の子はがっかりそうにしてそう言うと、最後にもう一回おもちゃのトラックを探しながら車の方にふらふらと歩いて行った。

「いないのよ」ママは敷物をたたみながら説明した。つまり、ネズチョークやクンブレックは作り物のおとぎ話のキャラクターであって、現実には存在しないということであった。

パパは「誰かが何かを失くして見つけられないときに、その責任を取る代わりに『クンブレックが取っていった』とか、『ネズチョークが盗んだ』とか、そういうふうには人はいらないよ」と言い、そしては笑った。

近くの草むらに座っていてすべてを聞いていたネズチョークたちは、心を揺さぶられた。

「えっ、取っていった？ 盗まれた……？ ヒック」チュポックスは困り果ててしまいはしゃつくりをし始めた。

ネズチョークの毛は普段はところどころが暗い茶色で、お腹の部分は白であったが、人間たちの話を聞いた怒りで背中の中の分厚い毛は茶褐色になった。ネズチョーク背中には黒い縞模様があり、耳には筆のようなフサフサがついていて、フワフワした尻尾の先も筆のようになっていた。服は十字の模様が付いた赤い(もしくは赤毛色の)ショートパンツと青いシャツといったいでたちであった。そのうちの二匹は、人間たちの議論を聞いたあと、前足で顔を覆い、「そうじゃないのに………」という感じで首を振っていた。

「なんと言ったらいいんだろう！」と肉球越しにつぶやき、悲しそうにため息をついた。前足を顔から離れたとき、水辺にペットのカゴが置かれているのを視野のはじっこの方で捉えた。

ネズチョークによく似たその生き物は、ケージの中であおむけで寝ていて、なんとも不機嫌そうな顔をしていた。

ネズチョークは、葉っぱに隠れたり、草の中に隠れたり、地面の凸凹に合わせて動いたりしながら、小走りでカゴに向かっていった。

「おい、おい！」ハムスターに声をかけ、前足でカゴの柵を触ってみた。

「だ、誰だ！？」空想の世界から現実に戻ってきたハムスターは、奇妙な音を聞いた。ハムスターは短パン姿の野生動物がカゴの外から自分を見つめているのに気が付いた。

「おまえは誰だ？」ネズチョークは聞いた。

「ホムカ」とハムスターは静かに答えた。野生動物との出会いはまたしても妙な緊張をホムカに与えた。そして口の中がヒリヒリする気がした。ハムスターは頭の中で「家にいればよかった」「ソフィーのベッドの下に隠れて返事をしなければよかった」と言っていた。「これでもうダメだな……食われちまう……。その前に今まで言えなかったけど、ローザチカに『大好きだった』ということを知ってもらいたかった」

「よお！ オレはチュポックス」と親しみやすい声で答えると、カゴの中に前足を伸ばした。「挨拶がわりに握手だ！」

「僕のことを今つかんで引きずり出そうとしている！ やばい、やばい、どうしよう」ハムスターの頭の中は凍り付いた。

がまんできなくなったチュポックスは「さあ」と前足を振りはじめた。

「やめてー」ホムカはそう答えると、舌を出し、目を覆い、前足をぴくぴくさせて死んだふりをした。チュポックスは前足を伸ばしたまま固まってしまう、驚いてハムスターを見つめた。

「なんだい、おまえさん」と尋ねるネズチョーク。

ハムスターは少しの間死んだふりを演じることができたが、緊張のあまり続けることはできなかった。

「たべないでー！」目を開けてそう言った。

「いや、そんなつもりじゃなかったんだけど」とチュポックスは戸惑いながら答えた。

「え、本当？」

「うそなんかつかない」とネズチョークはうなずいた。

「ああ、だったら最初っからそう言ってくればよかったのに。なんだか脅されたり威嚇されたりしているんじゃないかと思ったよ」

チュポックスは「え……そうだったかな」とまごついたが、戸惑いながらもうなずいた。

「僕はホムカ。ハムスターだ！」ホムカは寝ころがっておなかを出したまま、誇らしげに自己紹介をした。

「で、オレはネズチョークのチュポックス。ここで何をしているんだい？」

「チーズのことを考えて、そして家に帰りたいって考えているんだ」と、ハムスターは賢そうにそして意味ありげに答えた。

「で、俺が何をしているかって言うと……」

そのとき、おもちゃを探していた男の子がホムカのカゴに近づいてきた。チュポックスは言葉を言い終えることができなかった。

「俺はここに住んでるんだ。それでここで仕事をしてるんだ。でも今はここを立ち去らないといけない。じゃあまたな」チュポックスは前足を振って、近くの茂みに消えていった。

「次はこんなところではないところで！」とハムスターは答え、ドキドキする心臓を前足でマッサージしながら「ぜひ、うちに遊びに来てください」と言った。

一方、草原にいた男の子は、まだ自分の車を探していた。

「ビクトルちゃん」とママが呼んだ。「おもちゃが見つからなくても、しょうがないわ。次は気を付けるのよ！」「さあ子供たち、車に乗って！もうすぐ雨が降るぞ！」。

父は車のドアを開け、家族が乗り込むように合図すると、ハンドルを握ってエンジンをかけた。ママと子供たちはシートに座り、ドアを閉めた。排気ガスを出しながら車は町の方角に走り去っていった。

エンジンの音が消え、車が見えなくなると、背の高い草の間から出てきたネズチョークは一番近い切り株に登り、前足を額に当てて、遠くを見た。最初は片方の側を、次に反対側を見た。ネズチョークは前足を額に当てなくても目はよく見えたが、人間のこの仕草を知っているのも、しょっちゅう真似をしてやっていた。

人々を乗せた車が去り、自分の姿が誰にも見えなくなったことを確認すると、ネズチョークは口笛を吹いた。すると2匹目の小さなネズチョークが草むらから現れた。1匹目によく似ているがズボンがオレンジでシャツが黄色の2匹目のネズチョークは切り株に近づいて怪訝そうに上を見た。

## 第2章 フクシクとチュポックス

チュポックスが切り株から飛び降りると、もう1匹がその場に座りはじめ、チュポックスと同じように敵意を持って周囲を見回しはじめた。

「フクシク、人間たちはあのエンジンがついた手押し車をどこかに持って行ったか？」仲間を見上げながら、チュポックスはたずねた。

「ああ、どこかに行っちゃったよ！おどろいちゃったよ、人間っていうのはなんてなんて恩知らずで心のないやつらなんだ！オレたちはいつもあいつらを助けてやってるのに、オレたちのことは嫌いだっていうのかよ」とさげんだフクシクは立っている切り株から草や茂みをのぞき込んだ。ふわふわした綿毛は、怒りで震えていた。

『失われた宝を返し、価値あるものをもとに戻す、我ら偉大なるネズチョーク族』は何年も何年も人間と一緒に暮らし、価値あるものを人々に返してきたのに、人間はものを無くしたり、何か損なことや不幸があったりすると誰でもいいから誰かのせいにするんだ。オレたちのせいにすることもある」とフクシクは言った。フクシクはしっかりと勉強をした読書家で、言葉はたくさん知っていた。そしてずっと前に見つけた眼鏡も持っていた。そして周りの誰もが眼鏡というのは知性があり頭がよいことの証拠だということを知っていた。

「人間たちは何かを失うと、誰かがそれを盗んだと主張するんだ」とフクシクは続けた。

「でも実際は人間がものをよく無くす「なくしんぼさん」なだけなんだ！」チュポックスは、前足を胸にあててうなずいた。

「その通りだ！」フクシクは賛成した。

「切り株から降りて、人間たちが失くしたものを探しに行こう！」チュポックスは友だちにこの場所に来た目的を思い出させた。チュポックスはふと思い出した「ところで、人間たちが話していたクンブレックって誰のことなんだ？」

「知らないな。聞いたことがない！」と言うとフクシクは肩をすくめ、背の高い密集した草の茂みのほうに近寄っていった。そしてうなり声を上げながら男の子が念入りに探していたおもちゃの車を茂みから押し出した。チュポックスは驚いてフクシクの方を見た。

「フクシク、すごい！どうしてこの茂みの中に車があると分かったんだい？」チュポックスは不思議に思った。

「いや……オレは……実は……」まごまごするフクシク。「この草の茂みの中にあるって知ってたんだ。

「おまえ、ま、まさか自分で入れたのか？」チュポックスはそういう風に考えると恐ろしくなって目を丸くして前足で口を押し付けた。

「そうだ！そうだ！男の子が背を向けた時に、こいつをそっと茂みの中に押し込んだんだ！」。フクシクはきっぱりと答えた。「いつもいつも人々が無くしたお宝を村まで手で運ぶのはイヤだった。そしたらこんなスバラシイ車が見つかったんだぜ」と言う、自分の胸ほどの高さがあるおもちゃの車をなでた。村に車を走らせていったら、メスのネズチョークたちがため息をつきながら尻尾をゆらしてその様子を見るといったシーンをフクシクはすでに心にえがいていた。そして夕方には、可愛いメスの子を後ろに乗せて小川に行き、夕日を眺める……ボロボロの青いズボンを履いていてもモテモテになる、こう考えた。

「オレはモテモテになれる」と、フクシクは夢見心地でささやいた。

「いやいや、それじゃドロボウだろ」とフクシクの妄想にチュポックスの声が割り込んできた。「そんなことしたら部族の長老たちがオレたちが人々がなくしたものを探すのを禁止するかもしれないぜ」フクシクは声を上げた。

フクシクは「うん、まあ、でも……。だまっておけばいいんじゃないか」と言う、罪悪感からため息をついた。

「だまっとく！そいつは良い計画だ！」チュポックスはそうつぶやくと、背を向けてキッパリとした態度で人間たちがゆっくりしていた原っぱを探りに行った。

フクシクは頭としっぽを下げてチュポックスのあとに続いた。二人とも今までのことは忘れていて数分後には原っぱを見て回り、見つけたものをおもちゃのトラックの荷台にのけていった。

見つかったのは、違う種類のコイン 3 枚、ブローチ、ハンカチ、キャンディー。見つかったものはすべて車につみこまれた。キャンディーは残らず食べられ、包装紙は車のボディーにくっつけられた。

そしてネズチョークたちは車を森の中の道につっこんで、自分たちの村に向かって走らせ始めた。「ブルン・ブルン・ブルルン」とフクシクはエンジンの音をまねた。丘の上にトラックを置くと、それを押して、「ブルン・ブルン・ブルルン」と繰り返して、それからトラックに飛び乗ると、ぐるぐると楽しそうな鳴き声を上げながら、丘をかけ下りていった。トラックは何度も溝に落ちたり、茂みの中に入っていたりした。さらにはひっくり返ったりもして、枝の上で居眠りしていたカラスをおっばらうこと

もあった。ケガや事故やアクシデントを乗り切った二匹は楽しそうに笑いながらトラックをタイヤの上に乗せなおして村へと向かった。1 時間後には村は到着した。

### 第 3 章 ネズチョークの村

小さな森の住民たちが住む村は、川が流れる小さな谷にあった。村はあらゆる方向から守られていた。大きな岩は招かれざる客から村を守っていて、丘は風から村を守っていた。村には 50 ほどの小さな家があり、そこには 200 匹ほどのネズチョークが住んでいた。外の世界と村をつなぐせまい道には、2～3 匹の見張りがいつもいた。しかし見張りは絶対に必要というものではなかった。というのも、まず人間がこの村を見つけることはできなかったからだ。そして他の森の動物たちはというと、この戦いが好きでいつもさわがしいネズチョークたちとはうまく仲良く暮らすか、もしくは関わりたくないと思っていた。

チュポックスとフクシクは、トラックを村に入れるのにヘトヘトになっていて、「ブ、ブル、ブルン」とつかれた声をしぼり出していた。村の近くの道は曲がりくねっていてデコボコしていた。さらに 30 分も前からおもちゃのトラックを押していたのでつかれていた。

「もう運転手の役はやめたいんじゃないか？」チュポックスは皮肉っぽくたずねた。

フクシクは、汗をかいた前足でトラックを押しながら、がんこに「ブル、ン」と答えた。

「あとはおまえがやってくれ！」チュポックスは友だちの背中をたたき、草むらにたおれこんだ。

「ブルン、ブルン」とフクシクはうめきながら、中央の広場に向かって車を押した。

寝そべっていた若いネズチョークが「前にすすむんだ！道路の主！」と言うと、手をふって追いかけてきた。

フクシクはふるえる足で歩き続けた。みんな同情して見守っていたが、フクシクはつかれていたもので、それに気づかなかった。最後の力をふりしぼってトラックを広場のまんなかにも運び入れた。そしてボディーの上に登ると、足を広げて星の形にして固まってしまった。

「何を持ってきたんだい？」と、黒くて背の高い帽子をかぶった通りすがりの若者がたずねた。

「価値のあるものさ」と、フクシクは舌をもつれさせて言った。もう眠り始めていた。

「そうか。で、その車はどこで手に入れたんだい？」

「なんでそんなこときくんだい？」フクシクは興味がない感じで答えた。もう自分で何を言っているのか分からないくらいつかれていた。

チュポックスは家に帰ろうとしていたが、すれ違いざまに「おまえ、心が痛んでるだろ。すぐわかったよ」と言った。

「そうさ」と眠そうな声で答えたフクシクは、すぐに星の形のポーズでイビキをかいて寝てしまった。

朝になった。すっかり休息をとったチュポックスが家から出てくると、中央の原っぱではネズチョークたちが集会の準備を急ピッチで始めていた。

「ママ、ねえママ、みんな集まっているけど何が始まるの？」子どもたちは、母親といっしょに原っぱに向かって歩きながら、質問した。

「フクシクはおもちゃの車を盗んだんだ、だからみんなの前でしかられるんだ！」ママは首を横に振った。

チュポックスは「え、そんなにきびしいの？」と言うと、頭の後ろの毛をかきながら、草原に向かっていった。

集会所として使われている村の真ん中の原っぱで 1 時間ほど前から長老たちや仕事がなくヒマな人たちがフクシクのしたことについて話し合っていた。原っぱの真ん中には盗まれたおもちゃの車が置かれていて、その後ろには被告のフクシクが落ちこんだ表情で座っていた。目はうつろだった。

「フクシク、おまえははずかしくないのか！」黒いローブと長い白髪のカツラをかぶり、前足に木づちを持った小柄な男が、議長役として厳しい口調で言った。そしてハンマーを小さな切り株に叩きつけた。

議長は「ネズチョークの仲間のジャンボがフクシクの弁護人がとして名乗り出ました。ジャンボはフクシクのことを生まれてからずっと知っています。そしてフクシクは心を入れ替えるので許されるべきだと証言しています」と続けて言った。そして「しかし皆さん、フクシクの悪質ないたずらはこれが初めてではないことをよく思い出してほしい」と言った。

「そうだ、そろそろおしおきが必要だ」と誰かが声を上げた。

「強制労働だ！」また、別の声加わった。

「松やにと松の葉のトゲトゲにひたしておくべきだ。」黒髪の若者が提案した。「それからそいつをすっかり洗い流して、さらに北の森で 2 週間、薪を集めさせるべきだ」

「静粛に」議長が小槌で切り株を叩いた。「では、続けます。誇り高き大長老で誉れ高き我らの王であるフリュップス王が今日の告発人です」やる気のない拍手が何度かあった。

フリュップス王は、ネズチョーク族の長老の中でも最も重要な人物である。ネズチョークはみんなで意見を決めることになっているので、声の大きい者、うるさい者、がなり立てる者の意見が通りやすかった。しかし自らを「栄光のネズチョーク族」と呼ぶ彼らは「森の王国」という体制をとっていたので、体制の上では王であるフリュップスがネズチョークの最上位者であった。王は年を取っていたので実際のところできるのは鳩に餌をやったり、パレードに対して厳かに前足を振ったり、普段のお祭りで乾杯の音頭をとるといったことくらいしかなかった。乾杯の音頭を取ったときは、蜂蜜入りのシュワシュワした飲み物を何度か飲むものだった。それからどこかのお偉いさんの肩か暖かくてふわふわした脇腹に寄りかかって眠りにつく。年老いた王は誰にとっても害がなく、それなりに公平だったので、村の人々は王を愛し、古くてかわいらしい伝統として王を守ってきた。

今日のフリュップス王は、1 週間前からやっている朝の運動と、朝のコーヒーをやめておいたことが影響してか、急にではあるが元気になっていた。若いエネルギーと熱気を感じたフリュップスは、誰かと話をしたり、何かを考えたりしたいと思っていた。そんなときにフクシクの悪い行いを聞いた。だから自ら告発者になり、今日は正義の例を示し出して、そして法律が何であるかを皆に教えろと言いつつ出した。王は今、ネズチョークたちの輪の真ん中に立っている。時折、杖をつきながら興奮してあちこち移動していた。

「告発人、発言をどうぞ！」議長は小槌を叩いて宣言した。



「世はネズチョークたちが泥棒だと思われるのには反対である」杖としか呼びようのない棒を振って、フリュップスはおごそかに宣言した。

「王様、その通りだ！」賛成の声が聞こえてくる。

「私たちはこれまでずっと、宝物や価値あるものがあると、それを盗むのではなく、見つけて元に戻すということをしてきた」と王は言った。その言葉を聞き、すでに落ち込んでいた車の上のフクシクは、さらに落ち込んでしまった。

「とにかく、フクシクくんは常習的なトラブルメーカーなので、世はフクシクくんに1ヶ月間、宝さがしをやめさせることを提案する」

ざわついた群衆は王の提案について話し合っていた。

「弁護人、発言をどうぞ」と議長が言い、小槌を叩いた。

「フクシクは悪いことをした。確かにそうです」とジャンボは少し王に取り入ろうとした感じでそう言った。ジャンボは気のいいネズチョークであり、そしてフクシクの昔からの友達であった。「確かに罰には値する。でもそれほど厳しい罰が必要でしょうか？フクシクは自分の罪を告白し、とてもとても反省し、二度とこのようなことをしないと約束しました。なあ、そうだろフクシク？」ジャンボは聞いた

罪を犯したフクシクは重々しくうなずいていた。集まったネズチョークたちがガミガミと大声で、そのうえ人の言っていること聞きもしないで議論していた。その間もフクシクはずっとうなずき続けていた。ある者はフリュップスを支持し、ある者はジャンボを支持した。

「うなずくはもういい、頭が落ちてしまうぞ」と、議長はついにフクシクの動きを止めた。「さて、偉大なるネズチョーク族のみなさん、結論はどうする？」

「松やにと松の葉トゲトゲに…」ヒゲの生えたネズチョークが言い始めた。

「ああ、うるさい！もうわかったよ」近くの者が止めにかかった。

丸くて顔がぼっちゃりしたネズチョークが群衆の中から出てきて、ほっぺたに空気を入れて大きな声で発言した。

「フクシクには1週間と2日の間宝探しをさせない。これが我ら偉大なるネズチョーク族の決定だ！」

「あと松やにだ！」髭の生えた青年が再び口を開いた。

「お前はだまってる」周りのネズチョークたちは不機嫌になった。

「それでは、1週間と2日間は宝探しを禁止する」と議長はまとめた。「判決は決定、以上、終了。皆様ご参加に感謝いたします。それでは解散！」黒衣の若者は小槌を叩いて脇に置き、つかれた感じで前足を振った。

村人たちは、判決の内容を話し合いながら三々五々に散らばっていった。恥ずかしい思いをしたフクシクは車の上から地面に飛び降りた。

フクシクの友達たちはフクシクの肩を同情的にたたいた、だがフクシクがしでかしたことは自分でやったことなのでどうしようもなかった。フクシクは不機嫌な顔をし、耳と頭を下げたフラフラと歩いていった。しばらくして、3匹は長老たちに見つけてきた宝を差出した。他のネズチョークと同じように解放されたので、朝まで休むことができるようになった。フクシクは自分の家に向かったが、途中で大きいため息をついた。というのも、少し前にもフリュップス王に害を与える悪事をして怒ら

れたことがあったからだ。この悪事がきっかけでフクシクには「シュルベルト」というあだ名がつけられた。そのことを思い出したのだ。

#### 第4章 音楽とシュルベルト

シュルベルトの話はこんな感じだ。ある日、フクシクは友人のジャンボとチュポックスといっしょに、人間が無くした宝物を探しに森を旅していた。その日は天気が良く、人間にとってはうってつけの休日で、価値ある落し物が多くなることが簡単に予想できた。ほどなく、大勢の休日を楽しむ人間の姿が目に入ってきた。そこではテントを運んで旅まわりをしているサーカス団の団員たちが、騒々しく楽しく時間を過ごしていたので、ネズチョークたちはその音をたよりにやってきて、原っぱのはずれにある茂みに潜んでいた。団員たちは冗談を言ったり、笑ったり、踊ったり、キャンプファイヤーで何かを焼いたりしていた。車のトランクに置かれた見知らぬ機械からは、美しいメロディが流れ出し、集まった人の多くは音楽に合わせて体を動かしていた。

三匹のネズチョークたちもまったりとして音楽を聴きながら、人々がやっていることを興味を持って見ていた。見えてくるものはどれも楽しいものだった。マジシャンは大きな磁石を使った手品を披露したり、分厚い虫眼鏡で太陽の光を集めて火をつけたりして、仲間たちを楽しませていた。ピエロは怪しい実験をしていた。薬を使って大きな音を出したかと思うと、今度は小さな爆発を起こしたり、色とりどりの煙を出したりしていた。司会をやっている人は本の中の詩から詩を選んでそれをとても美しく朗読していたし、スタントマンは消火器から泡を出してどんちゃんさわぎをしていた。

団員達は長い間楽しい時間を過ごした。そして夕方になると帰路についた。休みをとっていたこの人たちはとても疲れていたが、急いでワサワサと荷造りをした。そして人々でぎゅうぎゅうの数台の車はエンジンをスタートし排気ガスを出し始めると、原っぱを出て街に向かって走り出した。車の煙と砂ぼこりが消え、エンジン音が遠ざかっていくと、ネズチョークの一行は、休んでいた人たちがレコードとレコードプレーヤー、それから磁石と実験道具と本と消火器が入っている箱を草原に忘れていったことに気がついた。ネズチョークたちはしばらく話し合って、レコードプレーヤーをはじめとするすべてのものを、かなりの重さではあるが、村に持っていくことにした。準備の作業は準備体操、運搬器具づくり、そしてえらく長い積み込み作業なんかがあって、時間がかかり大変なものだったが、それに負けないくらい大変な道中を経て、ようやく重い荷物は村に運ばれた。(ちなみにこの後、フクシクは荷台がついたおもちゃの車のことを考えはじめていたが、それがどのような結末になったかは私たちはすでに知っている)。宝物は、中央広場の真ん中におごそかに置かれていた。奇跡の機械を見ようと、ネズチョークたちは駆け寄ってきた。最後に到着したのは、老フリュップス王だった。

フリュップス王の頭の上には、空き缶でできた古めかしい王冠があり、頭にぴったりとはめ込まれていた。王冠は一度かぶってからというもの太い指にはめた婚約指輪のように王の頭の上にしっかりとはまってしまい、それからは外すことができなくなってしまっていた。王は最初はそれを外したくてしょうがなかったが、だんだんと頭についていることすらすっかり忘れてしまっていた。

王はいつも王冠をかぶっているのに、多くのネズチョークは王冠をかぶっていないフリュップスの姿がどんなだったかを忘れ始めていた。一族の中には王は寝るときも風呂に入るときも王冠をかぶっているといういじわるなウワサ話をする者もいた。しまいには「フリュップスが王冠を脱いで鏡を見ていたところに出くわしたことがあるが、どうも鏡に写っているのが自分でも誰だか分からないようだった」と言い出す者まで出てきた。

「ゴホン、ゴホン」フリュップスは咳払いをしながら、音楽を奏でる機械に向けて節のある杖を指し示した。「これが奇跡の機械というものかね？これはいわゆるトラクターかね？それとも、エヘン、電球かね？」

フリュップス王は、年老いてはいたが、科学技術の知識をひけらかすのが好きで、あらゆる方法で知識を披露してきたが、いつもタイミングが悪かったり、間違った内容を言ったりしていた。

フクシク、ジャンボ、チュポックスはレコードプレーヤーのまわりをあくせくと歩き始めた。

「さあ皆さん、素敵な見世物を披露いたします。前代未聞のショーです！」プロのエンターテイナーのまねをしてフクシクが言った。はるか後ろには紅色の雲が現れ、鳥たちがおびえた鳴き声をあげていた。フリュップスは悪い予感を胸におぼえた。しかし王は特に何もしなかった。無理もない、王は自分自身の身を守る本能よりも好奇心の方が強かったのである。ネズチョーク族のみんなは、機械を見ると信じられない気持ちになり、奇跡を期待して笑顔になり、次第に拍手を始めた。

「それではスタート」とフクシクが叫び、ボタンを押した。

レコードが回転し始め、スピーカーから「ヒュー」という音と「パチパチ」という音が聞こえてきた。みんなは首をかしげ、息を止めて、奇跡の機械を見つめていた。一番小さいネズチョークは、周辺の小木に登り、奇妙な果物のような見た目で枝から垂れ下がっていた。

「何も見えんし、何も聞こえないのお」耳が遠くなっていたフリュップスそう言うとは、機械に近づき、前足を耳に当てて聞いていた。

おそらくレコードプレーヤーの近くに置かれていた磁石に近づきすぎたのだろう、強力な磁力が王冠とそしてフリュップスの頭を急激に引っ張った。同時に威勢のいい音楽がスピーカーから流れ出た。

そして大変変なことが起こったように見えた。今までいたフリュップスがそこにはいない。正確に言うとフリュップスの頭が、王冠と一緒に磁石に引き寄せられて、下やら横やらのどこかよくわからないところに消えて行ってしまったのだ。老いた王は目を回し息を切らしながら必死に磁力が及ばないところに出ようとした。フリュップスは前足をピクピクさせながら逃げようとしたが、しかし強力な磁力はフリュップスを逃がさなかった。ネズチョークたちはそれを夢中で見ていた。音楽は大音量で流れ続け、離れて見るとフリュップスが踊っているかのように見えた。音楽に合わせて杖を振り、体を動かし、ときどき尻尾を立てたりしながら、前足で地面をかき分けていた。

「どうやら、じいさまはジグを踊ることにしたようだぜ」誰かがそう言って激励の拍手を始めた。

「じいさま、踊れ、そして回るんだ！王たるものはいつまでも若くないとな！」若いネズチョークたちは自分たちの長老がすばやく動けることを誇りに思っていた。だからフリュップスに向かってそんな風に叫んだ。しばらくするとフリュップスの筋肉は持ちこたえることができなくなり、老王は磁石に強力に引き寄せられてしまった。

フリュップスの様子が何かおかしいということに気付き始めたネズチョークの中で、勇気にあふれる者は王のもとに駆け寄っていった。楽しい愛のバラード風の音楽が流れる中、縄で縛られた長老は磁石から引き離された。大変な作業であった。

ジャンボとチュポックスはレコードプレーヤーに飛び乗って動きを止めようとしたが、回転しているレコードが二匹をすくい上げてぐるぐると回しはじめた。ジャンボとチュポックスは、ターンテーブルのレバーにぶつからないように、まるで競走馬が障害物を乗り越えるように、レバーを飛び越えていった。やっと思いでチュポックスが機械を止めることに成功し、レコードは最後の和音とともに止まった。

フリュップスは、うめき声をあげて立ち上がり、疲れて舌を出しながら、フクシクに指をさした。

フリュップスは息を切らしながら「お、おぬし、、、おぬしの名前は確か、、、シュルベルト！」とフクシクのことを有名な作曲家のような名前と呼んでしまった。「シュルベルト、もうこんなショーは二度とやめてくれ！」ようやくのところ息をできるようになったフリュップスは、威厳をもって杖を振り、そして疲れてよろよろになって家に戻っていった。

部族は共感の眼差しでフリュップスを見送った。その日以来、長老が披露したワイルドなダンスは、今でもネズチョークたちの記憶に残っており、フクシクは「シュルベルト」というニックネームで呼ばれている。

## 第5章 ホムカの救出

フクシクの宝探し禁止の週が始まった。フックスはとても悲しく、退屈だった。そんな友だちを悲しませないために、チュポックスとジャンボはよくフクシクを訪ねた。禁止が始まった最初の日のことだった、友だちたちは、ソフィーのペットのハムスターの話をした。

「あいつ、すごくいいやつだったよな」とチュポックスは話した。「でも、ちょっと変わってたな。家に誘ってくれたんだけど、その時に『実は真の故郷を求めててホームシックになってる』なんて言ってたな。どういう意味なんだろう。」

「いや、それはもちろん森のことだろ」フクシクは「あいつだって野生の生き物だろ」ときっぱりと言った

「野生の生き物だ」チュポックスとジャンボも賛成していたのでうなずいた。

「野生の生き物っていうのはどこに住んでいるものか？」フクシクは連想を続けた。

「どこかって？」と友だちたちが聞いてきた。

「森の中だろ！」

「確かにそうだな、フクシク」二人とも同意してくれた。「いつもながら、頭がさえてるし、なんでもよく知っているな」

ほめられてうれしくなったフクシクは「それでさ、お前が言うには、あいつカゴの中に入れられているんだろ？」とチュポックスにきいた。

「そうだな。さらに車輪の中でぐるぐると走らされてるんだぜ。なんていうイジメなんだ！」

「あいつ、つまり捕まえられてるんだろ。さらにいじめられてる！囚われているハムスターだ、解放してあげなきゃ！あいつは自由になるべきだ！」フクシクはがぜんやる気になった。

「自由だ！」フクシクの宣言に賛成したみんなは解放のための作戦の準備を始めた。必要な道具を集めて、前にホムカと出会った原っぱに戻ってきた。そしてカゴがあった川辺の場所にしばらく立っていた。チュポックスは敏感な鼻でにおいをかぐと、わずかではあるが空気の中に残っていたハムスターの香りをキャッチした。そしてその香りを追って、軽い足取りで街に向かって走り出した。何度か道を見失いかけたが、それでもチュポックスは再び道を見つけ、一番星が空に光るころには街に到着していた。新しい香りがたくさんただよっていたが、ホムカの跡ははっきりしてきた。

「オレについてこい」チュポックスは自信を持って他の二匹を導いた。夜の闇に溶け込むために黒の短パンを履き、顔には靴墨が塗られていた。静かに暗闇の中を動き回り、雨どいやさびれた路地をのぞきこんだ。ついに3匹のネズチョークたちは、きれいな2階建ての家にとどり着いた。

「あそこだ！」チュポックスは、2階の開いた窓の方を指さした。

「自由だ！」ジャンボは叫ぼうとしたが、フクシクはその口に前足を当てた。

「やめろよ！オレたちは隠れてるんだぜ！これは秘密の解放作戦だろ！」

「ごめん、ごめん」少し困った声でジャンボは答えた。

忍び足の3人組は、2階建ての建物に近づいていった。

ネズチョークたちは、フックが付いたロープを解いて、それを2階の窓の外側の平らになっているところに引っ掛けた。そしてロープを登り、手際よく窓から侵入した。中に入ると、月明かりに照らされた大きな檻の中にベッドがあり、ハムスターがすやすやと眠っていた。部屋の反対側には、オウムの入った別のカゴがあって、壁際には魚の入った大きな水槽があった。オウムは侵入者をけげんそうに見つめていた。ジャンボは、口に指を当てた。

「鳥ちゃん、しずかに！怖がらないで。オレたちはオマエのことも救いだすからな」

ロープを使って窓のところから部屋の中に降りてきたフクシクとチュポックスはハムスターのカゴを開け、持ってきた毛布の上に静かに移動させた。ネズチョークたちがロープを使ってハムスターの体を開け放たれている窓の方に持ち上げはじめたとき、誰かがドアの外の電気をつけた。そして足音が聞こえてきた。

急いで逃げるネズチョークたち。すばやくロープをたぐりよせたジャンボは、窓の近くの平らになっているところでぐるぐる巻になったハムスターを受け取り、そしてひどい扱いでドスンと自分の横に落とした。

「チーズ・・・」とホムカは寝言をつぶやき、軽くあくびをしながら寝返りを打った。

フクシクとチュポックスも窓のところまで登ってきた。ドアの外の足音が大きくなってきた。

「小鳥ちゃん、キミのことも助けに来るからね！そして捕まえられちゃった魚のみなさんのことも」ジャンボは「囚人」たちを安心させる言葉を言うと、握りしめた拳でさらにこう叫んだ「自由だ！」言い終わるとネズチョークたちはロープでぐるぐる巻きになったホムカを窓から投げ下ろし、自分たちも飛び降りた。

「自由だ・・・」とオウムのローザチカは戸惑いながらもうなずいて答えた。水槽の中の魚たちは言うべき言葉を見つけられず、ポカンとだまりこくっていた。

ハムスターのぐるぐる巻きのロープはほどけていき、地面から髪の毛一本分のところで止まった。今はロープにぶら下がって揺れている。ネズチョークたちはすばやく降りてきて、ロープを巻き取り、毛布を引きずっていった。今ホムカを起こすのではなく、森の中で起こそうと計画した。そうすれば牢屋で眠りについたホムカが目覚めると本来の家にいるという嬉しいサプライズになるからだ。

一行は月の光に照らされながら、森のはずれにたどり着いた。待望の自由が手に入ることを伝えるための準備をし、そしてハムスターを起こした。

「目覚めよ、友よ！」フクシクはハムスターの肩をゆすった。

「さあ、お前は自由だ！」チュポックスは、自分のことと自分がしたことを誇りに思っていた。

「自由だ！」ジャンボは心の底から叫んで、喜びのあまり飛び跳ねた。

「え？」ハムスターは前足で目をこすりながら、眠そうな声で言った「なに？」

ハムスターは体を伸ばしたりあくびをしたりした。そしてネズチョークを見たり、周りを見回したりした。そして驚きのあまり目を大きく見開いた。

「どこ、ここはどこなんだ！？あなたたちは何者なんだ！？僕のカゴはどこ！？」ハムスターは鳴き声だった。

「心配することはないよ、オレたちはオマエの問題を解決したんだから」フクシクは安心させようとして言った。

「もう大丈夫だ！」チュポックスもそう言った。

「さあ、走りだすんだ、友よ！君は、野に吹く風のように自由なんだ」ジャンボは重々しく宣言し、前足で森の闇の方を指し示した。遠くから狼のかすかな遠吠えが聞こえてきた。

「走れ？」と聞きだすホムカ。「どこへ、そしてなんで走り出さなきゃいけないんだい？」

ホムカは頭の中で「森の奥に追いやられて食べられてしまう」と言っていた。「さよなら、ローザチカ！でも、戦わずに諦めたりはしない！僕はそう簡単には捕まらないぞ！」勇敢な気持ちをもちながらハムスターはこんな風に考えた。

「さあ森の中へ。本当の故郷に逃げよう！チュポックスは、穏やかな口調で繰り返した。「おまえ、生まれた家に帰りたいって行ってただろ？川のそばの原っぱにいたときのことを覚えてるか？オレはチュポックスだ、思い出したか？」

「うわああああああ」ホムカは顔をおさえてうめき声をあげた。「僕の本当の故郷はあの部屋の中にあるんだ！あのとき言っていたのはその部屋のことだよ！」

「え、オレたちはお前が捕まっているものだと思っていた！」フクシクは驚いた。「森の中にくれば安心して住める、そういうもんだと決めこんでいた。」

「安全！？夜の森の中で？いやいや、今すぐにでも猛獣に食われちまって、ズボンのひもすら残りやしない！」ハムスターは必死になって鳴き声をあげた。

もう人間が言うところのヒステリーとかパニックとか、そんな状態だった。ネズチョークたちはあらゆる方法でホムカを落ち着かせようとし始めた。とても骨の折れる仕事だった。

なんとかしてホムカを落ち着かせることができた。そしてホムカは自分の人生を語りはじめた。

ホムカは赤ちゃんの頃から人間に飼われていて、物心ついた時にはカゴの中で生活していた。ホムカの世話をしてくれたソフィーは優しい女の子で、よくおいしいものをたべさせてホムカを喜ば

せてくれた。部屋にはホムカが大好きなオウムのローザチカがいて、水槽の中には静かな魚がいた。ホムカは人生にとても満足していた。そんな生活を森の荒々しい野生動物との生活と交換するのなんてまっぴらごめんだった。

「みなさん、僕のことを心配してくれていることには本当に感謝してるよ。でも頼むから僕のことを家に連れ戻してくれないかい。飼い主たちはまだ寝てる。朝までにカゴの中に戻れば、誰も僕がいなくなっていたことに気づかないと思う」ホムカは新しくできた友達にそうお願いした。

ネズチョークたちは重いため息をつき、ホムカと一緒に町に向かってのろのろと歩き始めた。夜中には再び町に着いていた。

再び窓枠に金属製のフックが鳴り響き、そして再びフクシクとチュポックスが2階に登り、下に残ったジャンボがホムカのふっくらした腰にロープを結ぶと、2階のネズチョークたちがホムカを持ち上げ始めた。体を動かさない生活をしていたハムスターはロープを登ることができなかった。ハムスターはすぐに引きずり上げられ、カゴのところに連れていってもらった。

その夜はローザチカはもう何が起こっても驚きやしなかった。だから穏やかな表情で二人を迎えた。

「ホムカ、ごめんよ！小鳥ちゃん、ごめんな！」救出に失敗して落ち込んでいたチュポックスは、悲しそうに言った。

「ホムカ、オレたち早とちりしてて、お前さんがここにいるのはつらいんじゃないかと思っちゃまって……」フクシクも意気消沈していた。

「お前は捕まってるんだと思ってたんだ。だから自由にしてあげたかったんだよ」とジャンボは付け加えた。

「みんな！僕の生活を見てれよ。幸せそうに見えないか？」ホムカはそう言うと、ケージの中の小さな電球のスイッチをつけた。

フクシク、ジャンボ、チュポックスはこれまで見たことがない贅沢な住み家を見て立ちすくんでしまった。誰もが夢見るような快適な住み家をホムカは手に入れているのだ。

カゴの中には、小さなソファ、椅子、クローゼット、鏡、洗面台、そして走って遊べる回転車もあり、床には小さな鉢に入った花も置かれていた。壁には風景の写真が掛けられていて、カゴ全体が居心地の良い小さなアパートのようになっていた。フクシク、ジャンボ、チュポックスは驚きの声を上げた。そんな素晴らしい生活と野生の森での生活をとっかえっこしたいなんてホムカは絶対に思わないだろう。

「僕の人生にはすべてがある！」とホムカは言った。そして、しばらくしてからため息をついて言った「初恋の相手のバスカ以外は」

ホムカはまたため息をついた。そしてスカートを履いて手作りの羽を後ろにつけた可愛いハムスターの写真を見せた。

「ある日、バスカは『エアバス』と書かれた飛行機を見て、自分もエアバスだと思い込み、自分で翼を作ってしまった。その日を最後にバスカはどこかに消えてしまった……」悲しげに言い終えると、カゴの壁に貼られた大きなポスターを指差した。そこには、真っ赤な字で「エアバス」と書かれた美しい真っ白な飛行機が写っていた。

一行はソファに座って一息ついていたが、そろそろ森に戻る時間になった。別れを惜しみ、再び窓から飛び降りようとしたところを、ホムカが引きとめた。

「僕のことを心配してくれてありがとう。森のみんな、キミたちに悲しい思いをして帰ってほしくないから、お別れにサーカスのショーを見せるよ。」とホムカは言った。

「ショー？」フクシクはげげんそうに尋ねた。

「そう、ショーだよ！」ほっぺたを震わせながら嬉しそうにうなずいた。

「オレたちが最後に見たショーは、なんていうかビミョウなやつだったけど……お前のショーはおもしろいのか？」ジャンボはうたがいがいながら聞いた。

「うん、心配しないで。絶対おもしろいって」ホムカはそう断言した。

ハムスターは戸棚からものすごく尖ったとんがり帽子と星の模様のマントを取り出した。その衣装を身につけると、小さな蓄音機のスイッチを入れた。音楽が流れ始めた。

「ええい！」ホムカはサーカスの猛獣つかいのように大きな声で叫んだ。

ローザチカは足を鳥カゴから出し、扉の鍵を開けて外に飛び出し、ハムスターの横の止まり木に座った。

「えええい！」ホムカはもう一度そう叫んで命令を出した。するとオウムはもう一つの止まり木に飛んでいった。

「えい！」次は宙返りをした。

そしてホムカがもう一度「ええええい！」と叫んだ。今度は魚が水槽から飛び出し、宙返りをして水の中に戻った。

あまりの素晴らしさに、フクシク、ジャンボ、チュボックスの3人は、ハムスター救出作戦に失敗したことも忘れて、ゲラゲラと笑い、大きな拍手をし始めた。

ホムカの芸の中でみんなが大笑いしたのはポケットに入れた風船が頭を軽くたたくと口から出てくるという芸だった。長い間、ホムカはさまざまな芸を披露してネズチョークたちを楽しませてくれた。帰る時間が来ても、森のみんなはこの場から離れようとしなかった。しかし、もうどうしても帰らなくてはならないという時間がついにやって来てしまった。ホムカは新しくできた友だちを抱きしめ、これからの幸せを願った。フクシク、ジャンボ、チュボックスはホムカにもう一度を自分たちの村に来るように招待し、村までの道のりを地図に描いた。別れを告げて森のはずれまで戻ってきたネズチョークたちは、救出には失敗したけれどサーカスのショーは見れて良かったと考えていた。その後も、ネズチョークたちはホムカのすみかで見たいいろいろなサーカスの技を真似して見せて、村の仲間たちを楽しませた。しかしある日、手品の最中にチュボックスがボールを飲み込んでしまい、みんなとても恐ろしい思いをした。こんなことが起きてからというもの、ネズチョークたちは変なものはあんまり口に入れないようにしないほうがいいと考えるようになった。

## 第6章 ネズチョークたちの宝物

宝探しを行うネズチョークたちにとってくたびれる長い一日が終わろうとしていたが、結果としてこの一日は大成功であった。その日、チュボックス、フクシク、ジャンボの3匹は、夜明けとともに起



き出して、それから遠くの空がオレンジ色に染まり、大きな太陽の玉が西の高い木の後ろにゆっくりと落ちていくまでずっと森の中を歩き回っていた。いたるところで人々が落とした価値ある宝を拾っていた。

チュポックス、フクシク、ジャンボが持っていた袋には、ひろったものがいっぱい詰まっていた。

「もう村に帰る？」ジャンボは、ビショビショになった頭を同じくらいビショビショの前足でふきながら尋ねた。

「そうでなければ、短パンを乾かさないと・・・」とチュポックスは答えた。

三匹は、草むらに足跡を残しながら必要な道を選んでネズチョークの村に向かって歩いた。たどり着くまでには25分ほどかかった。村の入り口の守衛のところを通り過ぎ、大通りを歩いていくと、フリュップス王の家にたどり着いた。王はチェック柄の服を着て、体温計をわきに挟んで玄関の前のポーチに座っていた。そしてカップから湯気が出るあたたかい飲み物を飲んでいて、老王は元気がないようだった。

「見つけた宝は誰に渡すべきですか、王様？」ポーチに登り、肩から袋を下ろしたチュポックスが尋ねた。

「おお、すまんの、今日は体調が悪いから、宝物を例の「質屋」という名前の保管庫に持って行ってくれないか」と、フリュップスはかすれた声で答えた。「国の財産を管理する長老たちが朝からそこで仕事をしている」

貴重な宝が入れられた保管庫は、ネズチョークたちから「質屋」という不思議な名前と呼ばれていた。なぜならネズチョークたちは、町に住む人間たちが貴重なものをよく質屋というところに持っていくのを知っていて、質屋というのが一番安全な場所だと思っていたからである。人間の真似をした森の動物たちは地下の大きな洞穴に「質屋」という名前をつけた。保管庫にいる国の財産を守る長老たちには「カネモッチ」と「タカラッチ」というあだ名がつけられていた。長老たちはフリュップスのように年老いていて、賢く、そして仕事に責任感を持っていた。責任感についてはもう少し話を先に進めると本当にそうであるということが分かる。

ネズチョークたちは、フリュップスの一日も早い回復を願いながらポーチを後にした。そしてネズチョークの宝物が保管されている洞窟へと向かった。洞窟の入り口は高い丘にあって北風から村を守っていた。入口の守衛に挨拶をして、地下に続く長く曲がりくねった通路を歩いていった。廊下は背の高い広いホールにつながっていた。

ホールの壁際には、分厚い本が置かれたテーブルがあり、2人の歳を取った紳士が座っていた。一人は背が低くてふくよか、もう一人は背が高くてやせていたが、素敵なもみあげがあった。二人とも眼鏡をかけていた。

「長老のみなさま、こんにちは」ネズチョークたちはそうあいさつをした。

「おお、若い宝さがしのみなさん、これはこれはどうも。今日も大金とか小金とか、指輪とか首輪とか、イヤリングとかイヤじゃないリングとか・・・そういったもんをたくさん持ってきたかね？」背の高い「カネモッチ」はそんな愛想のよいあいさつをした。

「どうも、どうも」と、台帳から目を離さずにほっぺたが大きい「タカラッチ」がうなずいた。「何を持ってきたのかね？」

「たくさんあるよ」とうれしそうなフクシクが答えた。仲間たちは宝を洞窟の床に並べ始めた。

「さて、それでは。拝見して、評価して、それがすんだら棚にならべようか」と言う「タカラッチ」はテーブルから虫眼鏡を取り出し、持ってきたものをじっくりと観察し始めた。

「ダンボール箱、1つ！ 壊れている銀のくさり、1本！ グシャグシャになっている鉄道新聞、1紙！ 金物のブローチ、1つ！ 箱に入ったチョコレート、両端に噛んだ跡がある、それが1つ！」「タカラッチ」は持ってこられた宝の名前を読み上げた。

「噛んだ跡！？」ジャンボとチュボックスは大声で言った。

「この通り、ほら噛んだ跡がある。さらに歯形から判断すると、歯の1本は欠けているのが分かる！」と「タカラッチ」は淡々と答えた。

ジャンボとチュボックスはフクシクのほうを見た。なぜならフクシクの歯は欠けている、というか歯の一部が折れていたからである。

「そうさ、ピーナツと干しブドウが入ったチョコレート。おいしかった、確かにとてもおいしかったよ……」フクシクはつらつらと言いはじめた。

ジャンボとチュボックスはフクシクをたたいてやろうとしてフクシクの方に向かっていった。その時、フクシクはすぐ近くに小さな隠し扉があるのに気付いた。たたかれるのから逃げようとしてそこに隠れようとした。扉は古く、放置されていて、神秘的な感じだった。

長老たちがフクシクが動き出したのに気づいたのは遅すぎた。

「おい、やめるんじゃ」と「タカラッチ」は叫んだ。

カネモッチは、虫眼鏡を落として恐怖に襲われ無言になった。

その音を聞いてフクシクは「皆さま、何ておっしゃいました？」と言い後ろを振り返った。しかし、その時、追いつこうとして近づいてきたジャンボとチュボックスは転んでしまい、フクシクの上に倒れてしまった。そして3人とも奥に広がる通路に転がっていった。背後の扉が閉まり、そして暗闇が広がった。

「あの奥にはうち捨てられた迷宮があるのじゃ！」と「カネモッチ」は叫び続けた。しかしそんなことを言ってももう後の祭りだった。扉は中にいる3匹と外の世界を遮断してしまっていた。

暗闇の中、ネズチョークたちは数歩進んでは戻り、進んでは戻りを繰り返していたが、迷宮の壁をいくら手探りしても扉は見つからなかった。

「どうしたらいいんだろう」チュボックスは静かに言った。チュボックスは明らかにおびえていた。

「何かが光っている、光の方に向かって行こう。行ったら分かるだろう」とフクシクは答えた。

三匹はあちこちに張り巡らされた蜘蛛の巣にからまりながら、暗闇の中の迷宮を歩き回った。唾を吐いて蜘蛛の巣を払ったり、大声で叫んだりうめいたりしていた。

「なあ、考えてみろよ」考え込んでいたジャンボがこう言い始めた「もしかしたら、巨大なクモやヘビ、コウモリが住んでるんじゃないか。しかも毒をもっているようなやつが……」

「毒を持っているコウモリなんていないよ！」フクシクは反論した。

ジャンボが「毒を持っているかわかるのは……まあそいつかがおまえの頭の上に飛び乗ったときだろう」と不吉な答えをすると、ネズチョークたちは「ぎゃあー」と声を合せて叫び、そのまま迷宮を駆け抜けていった。

ハリケーンのように疾走し、無限に続く曲がり角をどんどんと曲がっていき、ドアからどんどん遠ざかっていった。ついに行き止まりまで来て、ネズチョークたちは一息ついた。

「怪物がいたんだよ。うそじゃないんだ。」ジャンボはうめきながら言った。

「オレも見た！」と賛成するチュポックス。

「なに言ってんだよ、何もないじゃないか。」

「あ、確かに、何もない。」とチュポックスは肩をすくめた。「そんなことより、ここから出よう。ところで、オレたちどこにいるんだ？」

「オレたちの村の地下には古い迷宮が張り巡らされているようだな」とジャンボは答えた。「ここにはいくつかの出口があるはずだ。どれでもいいからすぐに見つけよう……。」

「喉が渴いた」とチュポックスは訴えた。「レモネードがほしい」

「オレは何か食べたい」と付け加えるジャンボ。

3匹は再び走り出した。足の感覚はもうなかった。曲がり角の先にはまっすぐな道があり、それが繰り返されるばかりであった。もう一日くらい走ったんじゃないかとフクシクが思い始めた。そのとき、フクシクは突然ジャンボの背中に激突し、後ろからチュポックスがぶつかってきた。ネズチョークたちは倒れてしまった。

「おい、ジャンボ、なんで立ち止まったんだ！」ジャンボの下敷きになっているフクシクはそう言った。

しかし、ふと顔を上げると、天井の割れ目から一筋の日の光が差し込んでいるのが見えた。

「おい、オレをそこまで持ち上げてくれたら、その割れ目を広げて通路を作ってやるぜ」とジャンボが提案した。ジャンボは立ち上がり、チュポックスの肩に乗り、割れ目をゴンゴンとつつき始めた。すると土のかたまりが落ちてきた。そして、そのあとフタが閉まった宝箱がゴロゴロと音を立てて崩れ落ちてきた。さらにネズチョークたちはその先に光を見た。

「ああ、宝物だ」とチュポックスは少し驚いた。

「これはどこから出てきたんだろう？」フクシクは不思議に思った。「オレたちのじいさまたちは200年前にこのあたり全部で宝をさがしていたんだよな、確か」

「まあそんなことはどうでもいい、持って行こうぜ」とジャンボは言った。

「チュポックス、オレのことを放り投げてくれ」

チュポックスは体が小さいフクシクを放り上げた。それからすぐジャンボもこのさっきできたトンネルに飛び上がった。でこぼこしているところに爪を立てて体を引き上げた。すると目の前に穴が広がっているところに出てきた。進んでいくとフリュップス王の家のキッチンに出た。汚れたジャンボは暖炉から出てきたのだが、その横の床には、フリュップスの孫が座っていて、まつぼっくりで遊んでいた。

ジャンボは「なあ君、おじいちゃんはどこにいったい？」と聞いた。

「みんないなくなっちゃったよ。迷路に入って出てこなくなったネズチョークたちをさがしに行くって言ってた。村中のみんなでさがしに行ったから村には誰もいないよ」

「オレたちの他にも迷路に入って出てこなくなったヤツがいるって言うのかい？」ジャンボは驚いた。

「かわいそうなヤツらだ。なあ君、ロープをかしてくれよ」

フリュップスの孫はロープを持ってきた。ジャンボはそれをさっき通ってきた通路の中に入れた。穴の下の方にいた用心深いネズチョークたちはまずはまず宝箱を持ち上げてもらった。そのあとで自分たちもロープを上っていった。

キッチンの真ん中に立って、くしゃみをしたり、ホコリを振り払ったりしていると、玄関のドアがバタンと鳴り、しばらくしてフリュップス王が部屋に入ってきた。鼻が赤くなっていて、頭に貼られた湿布はほとんどはがれていた。

「なんということだ！」と王は驚いて言いました。「洞窟の中をくまなく探したというのに。」

「はい、自分たちで出て来られました」と、小さいネズチョークたちは照れくさそうに答えた。

「長老様、僕たちは宝物を見つけたんです！」とちびっこたちは自慢して言いました。

「なんと！これは私が最初に見つけた宝を入れておいた箱ではないか！25年前にどこかで失くしてそれっきりだったのに…どこで見つたのじゃ？」

フリュップス王は大事そうに宝箱をなでて、それからフタをはずした。そして孫と一緒に床に座って、古い宝物を見始めた。そして、フクシク、チュポックス、ジャンボの3人はおでこの汗を拭いて、水を飲んだ。そのあと、村の他のみんなを探しに行き、「自分たちは見つかったから、もう探す必要はない」と伝えた。

「なあ、きみたち」フリュップスは若いネズチョークたちに声をかけた。「いつになったらじい様たちの言うことを聞くようになるんだい？先週の判決の一件でもう飽き飽きなんじゃないのかね？」ネズチョークたちはそろってため息をつく、このあいだの長老たちに逆らった一件が最終的にどんな風に終わったか、それを思い出しながら、フラフラとした足どりで出口に向かった。

## 第7章 フクシク、チュポックス、ジャンボが長老たちの言うことをきかなかった理由

ある日、フクシク、チュポックス、ジャンボの3匹は、村の中央の広場に集まっていた。チュポックスはリンゴをムシャムシャ食べていて、ジャンボは葉っぱをかんでいた。フクシクはズボンのポケットに前足を突っ込んで、どこに行ったらキャンディーが手に入るのかと考えていた。

突然、フクシクはとても面白い考えを思いついた。

「なあみんな！宝物はなんで国の『質屋』に預けなくっちゃいけないんだろう。理由なんてあるんだろうか？なんで直接人間のところに持って行って、誰が持ってきたか分かるように渡したりしないんだろう？」

チュポックスはムシャムシャ食べるのを一回やめた。ジャンボは「長老がそう言っていたから、そうすべきなんじゃないか！」と言った。

「でも、もしそういう風にやったら、人間からたくさんお礼をもらったり、ほめてもらったりしてもらえるんじゃないか？」フクシクは負けん気でそう言い返した。

「フリュップス王のところに行こう！全部説明してくれるはずだ」チュポックスはようやくリンゴを食べ終わった。

「おいおい、説明を始めたら最後、夕方まで『授業』が続くことになるぜ。」フクシクは反対した。

「いや、まあ王様のところに行くのもいいんじゃないか？王様だったら絶対に教えてくれるはずだよ」と、ジャンボは賛成した。

フクシクの反対の声には耳を貸さず、みんなはフリュップス王の家に向かって移動した。

フリュップス王の家の前でネズチョークたちは立ち止まって身だしなみを整えた。王はだらしのないネズチョークを好まず、服装や髪型に問題があると杖でポンとたたくこともあったからだ。チュポックスがドアをたたくと、1 分後にはスリッパを履く音と咳の音が聞こえてきた。扉が開くと、そこにはフリュップス王が立っていた。古くてボロボロのローブを着て、短いズボンを履き、頭にはくしゃくしゃになったブリキの王冠をかぶっていた。杖の代わりに手には単なる曲がった長い棒を持っていた。

「お若いの、今日は何をしにやって来たのかね？」王はやってきたネズチョークたちに愛想笑いをしていた。「もしかするとアレかね、君たちのお母さんがワシに甘いチーズやビンに入ったジャムを持ってこさせたとか、そういうことかね？」

「いいえ、陛下！」チュポックスは前に出てきて言った。「実は教えてほしいことがあるんです」「教えてほしいことがあるじゃと？」王はウンザリとした気持ちになった。そして咳をし、頭を激しく振って、王冠をジャラジャラさせた。「短めに頼むよ。そんな話を聞くより暖炉のところに座ってゆっくりしたいんじやよ！」

「教えてください、王様！もし見つけた宝を堂々と人間のところに持って行ったらどうなるんでしょうか。お礼をもらったりできると思いますし、人間と友達になったりもできるんじゃないかと思います」ジャンボは、まるで準備でもしていたかのように、このセリフを一息で吐き出すように言った。フリュップス王は首を横に振り、ため息をつきながら答えた。「我らはずっとずっと、人間たちがなくしてしまった『宝物』を人間たちに運ぶことを続けてきたのじゃ。姿を見せることもなければ、『宝を見つけたのはオレたちなんだ』と自慢することもない。ほめられたり、お礼をもらったり、感謝されたりすることは期待などしていないのじゃ。それに、もしほめられたとしても、それは自分の損にしかない。なぜなら、ほめられたすべてのネズチョークが自分が一番優れたネズチョークだと勘違いしはじめるじゃろう。だからよくないのじゃ」。フリュップス王はネズチョークたちしげしげと見つめ、そして前足を使ってドアを閉めた。

フクシク、チュポックス、ジャンボは互いに顔を見合わせた。

「でも、王様！……」チュポックスは反対意見を言おうとしたが、ドアは閉まってしまっていて返事はなかった。

フクシクは舌打ちをして、仲間にむかって言った。

「オレにいい考えがある。王様が言ったことが本当かどうか実際やってみて確かめてみないか？もしかしたら古いやりかたを変えた方がいいってことになるかもしれない。もし王様が間違っていたら、村のネズチョークたち全員がオレたちのことを感謝してくれるし、ほめてもくれるんじゃないか」

「お前、何言ってるんだ。聞いてただろ。ほめられることを期待するのは悪いことだし、ましてや大人がほめてくれるようにああだこうだするなんてとんでもない！」ジャンボは顔をしかめた。

「そんなこと、どうでもよくないか？」フクシクは苦笑いした。「なあ、行こうぜ！何ビビってるんだよ」

残りの 2 匹は肩をすくめ、お互いに顔を見合わせ、フクシクに追いつくために走った。

それからフクシクは「ええと、それでだな」と言い、かしこまった顔をしてチュポックスのほうを向いた。「お前の親たちには『ジャンボの家で鬼ごっこをしてるよ』と言っておこう」

それからフクシクはジャンボの方を向いてこう続けた。

「お前の親にはみんなでチュポックスのところに遊びに行ったら言おう！そしたら親たちはオレたちは大人の近くにいるって思うだろう。それでもって、オレたちは昔のルールってヤツが正しいか確かめに行く」

ネズチョークたちはそれぞれ別の方向に散っていき、やがて同じ場所に集まった。

フクシクは前足にチャルメラと太鼓とバチ、それから古いブローチと曲がった棒と黒いハンカチを持っていた。チュポックスはこれを見て、聞いた。

「なんで、そんなモノを持ってきたんだい？」

フクシクは詳しく説明をした。

「ブローチは木こりとその奥さんに持って行こう。チュポックス、お前はチャルメラを吹くんだ。それとジャンボ、お前は太鼓を叩く。これでにぎやかになる。そして、この棒と黒いハンカチで旗を作って歩くんだ！ここまでやったら人間たちに喜んでもらえるだろう」

ジャンボは、白いドクロと骨が刺繍された黒いハンカチを怪訝そうに見て尋ねた。

「これって本当にキレイな旗なのかなあ？」

フクシクはジャンボのことを少しバカにしたような目を見て、こう答えた。

「絶対にそうだ、自信がある。こういう旗を持っている人間の写真を何度も見たことがあるんだ。さあ木こりの家に行こう！」

一分もしないうちにフクシク、チュポックス、ジャンボは林の中の小道を歩いていた。チュポックスはチャルメラを吹き、ジャンボはバチで太鼓を叩き、フクシクは黒い旗と古いブローチを持っていた。カラスがくちばしにチーズをくわえて木の上に座っていたが、この様子に驚いて、まずくちばしのチーズを落とし、それから枝から落ちそうにもなった。

三匹が木こりの家の近くまで来たとき、木こりの奥さんは洗濯物を干しに外に出てきていた。空気を突き破るようなチャルメラの音と耳をつんざくような太鼓の音を聞いた奥さんは驚きのあまり息を呑み、洗濯物の入った洗面器を落としてしまった。

奥さんはおかしな一味がドクロと骨が描かれている黒い旗を持っているのを見て、悲鳴を上げながら小屋に逃げ込んだ。そのあとすぐに髭の生えた大柄な木こりがライフル銃を持って外に飛び出してきた。そして大きな鹿のように雄叫びをあげた。木こりが狙いを定めて銃を撃つと黒い旗に当たった。棒が折れて、布がフクシクの頭の上に落ちてきた。ネズチョークたちはおびえ上がり、あわてて逃げ出したが、布に足をからめたフクシクは砂の上に転んでしまった。そしてチュポックスとジャンボも続けざまに転んだ。木こりは再び声を上げて銃を撃った。今度は古いモミの木に当たり、悲鳴を上げているネズチョークたちの上にとがった葉っぱや実が落ちてきた。ネズチョークたちは悲鳴を上げながら、抜きつ抜かれつ家の方に走っていった。

村から少し離れたところまで来て、その時初めて何が起こったのかを話し合った。フクシクは息を切らしながらチュポックスのことを指さした。

「お前のせいだ、チュポックス！チャルメラを大きく鳴らしすぎだったんだよ！だから、誰も歓迎なんてしてくれなかったんだ」

「俺かよ！俺と何の関係があるんだよ！？」チュポックスは泣いた。「最初から悪いアイデアだったんじゃないか！」

「だったらジャンボのせいだ！太鼓を大きくたたきすぎたんだ。もっと優しく静かにたたかなくっちゃいけなかったんだ」とフクシクはキツパリと言った。

「えっ、お前そんな風に言って自分で自分のことが恥ずかしくないのか！？」ジャンボは怒っていた。

ネズチョークたちは口論したり非難したりしながら歩いた。そして村にたどり着こうとしたとき、突然、上空から歳をとったカラスの鳴き声が聞こえてきた。

「口げんかはもうそれくらいでええ。もうすぐお前たちは仲直りさせられるのじゃぞ」と言い、足で村の方角を指した。「じいさまたちの言うことはよく聞いて守らないといかん。じゃないと森のそこかしこで鉄砲の音が聞こえることになるぞ。そしたら生きていくこともできん。おぬしらは寄生虫か？役に立つことをする代わりに、罪のない動物や鳥を怖がらせるようなことばかりしておる。おぬしら親にお仕置きされるぞ……」

カラスはうなりながら怒り続けていたが、ネズチョークたちはもう聞く耳を持たなかった。フクシク、チュポックス、ジャンボは村の方向を見た。ネズチョークの一族全員が、いたずらな友人たちを静かに待っていた。フクシク、チュポックス、ジャンボの３人のことを両親たちが迎え入れた。フリップス王はため息をつき、首を振って悲しげな顔をした。

## 第 8 章 クンブレックとの出会い

ある夏の天気の良い日のことだった。フクシクのお仕置きの期間は終わっていた。フクシクはジャンボやチュポックスと一緒に宝探しに出かけた。三匹は朝とても早いうちに村を出発し、ネズチョークたちが宝物を探すときによく口ずさむ「さがしものの歌」を口ずさみながら、先へ先へと進んでいった。道を外れて森の奥に続く道にさしかかったときのことだ、三匹はふと立ち止まった。

そこにはネズチョークとよく似た３匹の動物がいた。そいつらは草を積んだカートを引きずっているところだった。正面衝突寸前だった。

この３匹は、服やおさげの髪型の感じからメスであることが分かった。ネズチョークとはよく似ていて、毛の色が濃いか薄いかというところと、尻尾がとてもフワフワしているかそうでないか、それぐらいしか違いがなかった。

ネズチョークたちは、外見はかわいらしいものの、森の動物である。自分たちの村の近くで見知らぬ者に出会うと、本能が働いてしまい自分の持ち物を守ろうとするのであった。数秒後、まずフクシクが前に出た。

「お前らは何者だ？」威嚇するような口調で切り出した。それから加勢してくれることを期待しながら仲間の方に振り返った。ジャンボとチュポックスも眉をひそめて真剣な顔をしていて、戦う気まんまんだった。

「あたしたちはクンブレック族よ！畑と川と山の支配者、栄光のクンブレック族よ！」三匹の中で一番背の高いクンブレックは堂々とそう言った。「あたしがクワスーリヤ、こっちはククビンバ、そしてこっちはマバーシャよ。で、あんたたちは何者なのよ？」

「オレたちはネズチョークだ。失われた宝を返し、価値あるものをもとに戻す、偉大なるネズチョーク族だ！お前たちはどこに行くんだ？そして、カートには何を乗せているんだ？」フクシクの肩越し

に、ジャンボが言った。

「あら、なんであなたにそんなこと報告しなければならないの？」マバーシャはもっともらしい答えをした。

「どこかに向かってたんでしょ？だったらあんたたちが行きたい行き先に勝手に行けばいいじゃないの」ククビンバは、声に脅しをかけて付け加えた。

「ここはオレたちの土地だ。だから誰が何のためにここを歩いているのかを知る必要がある！」チュポックスはそうキツパリと言った。

「じゃあここがあなたの土地だっていうことを証明する書類とかあるんですかあ？」クワスーリヤは皮肉を込めてそう尋ね、クククと笑った。予想もしない質問にネズチョークたちはとまどっていた。クワスーリヤがした質問がおかしかったので他のクンブレックたちも笑い出した。ネズチョークたちは怒った。

フクシクはクワスーリヤに近づき、道から追い出そうとした。クワスーリヤは少しは動いたが、すぐに強引な態度でもともと進んできた道を突き進もうとした。道をフクシクにゆずるなんてことはしなかった。

「おっと、お若いオスたちのみなさん、前足はしっかりと隠しておいたほうがよさそうですよ」クワスーリヤはそう警告し、眉をひそめて、鋭い歯をむき出してニヤリと笑った。

森の道の状況は、ますますヒートアップしていった。

クワスーリヤは、前に原っぱで格闘技の本を見つけたのだが、そこに書かれていた知識は全部習得できていると考えきっていて、自信があった。本は「武器を使わない自己防衛」というマニュアル本で、クワスーリヤは道着(どうぎ)を着た人たちの写真をよく覚えていた。自信たっぷりのクワスーリヤは試合が始まるのが待ち遠しくて、笑顔を見せていたが、マバーシャとククビンバは前足で口をおおってあくびのマネをし、「こんな試合、前にも見たことがある～」とか言っていた。

フクシクはさらに強引にクワスーリヤを押しつけたが、反対に鼻を殴られてしまった。痛かった。目には涙があふれた。すばやく自分を殴った手を引っ張ると、「お返しだ」と言わんばかりに引っかいた。クワスーリヤは悲鳴を上げ、目を見開いてフクシクに突進し、噛んだり引っかいたりしはじめた。鳴き声や叫び声、引き裂かれて毛やボロボロの毛皮……森の民たちは実に動物らしい喧嘩をはじめた。これまでがんばってきたトレーニングの結果とか、研ぎすまされた技であるとか、技術的な準備なんてものは全く役に立っていなかった。

フクシク、ジャンボ、チュポックスの3匹は、1時間くらいして村に戻ってきた。体じゅうがジンジンして、服はボロボロ、傷だらけだった。

ネズチョーク族のみんなは「不幸なヒーロー」たちが事件に毎回毎回巻き込まれることにはすっかり慣れっこだった(あまりにしょっちゅう巻き込まれるから考え方によってはうらやましくなるほどであった)が、3匹がしどろもどろになって話をしていると、誰もが被害にあったこの3匹に同情しはじめた。そして笑いごとではなく、身が引き締まる思いもした。確かにそれはそうだ、何と言ってもネズチョーク族に瓜二つだけれども今まで見たことがない獣たちが自分たちが住んでいる村の周りを歩きまわっていて、さらにとても大胆な行動に出ているんだから！ネズチョークのみんなは部族の長老たちに相談した。何でも知っているはずのこの者たちもクンブレックのことは何も知らず、頭を悩ませていたが、年老いたフリユップスだけは意味ありげに声を上げた。磁石に引



っ張られて踊ったときに自分が考え付いた踊りのことを思い出しながら足をプラプラさせ、そして杖に寄りかかりながらこう言った。

「わしはそれが誰だか知っておるぞ」

興味しんしんなネズチョーク族のみんなが、息を止めて老王の周りに集まり、耳をそばだてていた。

「むかし、わしのおじいさんのおじいさんの時代のことじゃ、そのころはネズチョーク族とクンブレック族は一つの部族じゃった。その頃にはネズチョーク族というのもクンブレック族というのもおらんかった……」

「じゃあそのころは誰がいたんですか！？」部族全員は愛する王の周りに集まり、それぞれ思い思いの場所に座った。そして一斉に息を飲んだ。

「そのころいたのはミミナガモフモフ族じゃ」フリュップスは悲しげに言った。「ミミナガモフモフ族はかわいらしくて、優しい心の持ち主じゃった……」

「ミミナガモフモフ族！？」ネズチョークたちは続々と驚き声を上げた。

ネズチョークたちはみんな小声で「つまり耳が長くて、モフモフしていたってことなのか！？」といったことを口々にしていた。

フリュップスは首をたてに振り「ああ、そういうことじゃ……」と言った。「人間たちが無くした宝を見つけ、それを人間たちに届けることが自らの目的と使命、そして生きがいであると考えていた太古の昔から続く輝かしい一族じゃった」

「なぜ人々が無くしてしまったものを人々に返さなくてはいけないことになっているのか、ミミナガモフモフ族の誰もが知らなかったし、理由も覚えていなかった。しかし誰もがそうしなければならないということは分かっておったのじゃ。つまり『これはやるべきことだ！以上である！』という掟(おきて)になっておった。」フリュップスの声は興奮で震えていた。「このミミナガモフモフ族は『森の良心』であり『森の希望』でもあったのじゃ。誰とでも仲良くすることができるこの種族の者たちは、たとえ寒さが厳しいときでも飢えがひどいときでも、どんな動物でも救ってやっていたのじゃ。つまり体を温め、食べ物を与えることができたのじゃ……」

「ていうことはゾウにもそんなことをしていったことですか？」沈黙の中、誰かが低い声でたずねた。

「静かにしろよ！ゾウにやるわけないだろ！？アフリカじゃないんだぞ、ここは！？よく考えろ！」集まった者の中には怒っている者もいた。

ジャンボは「王様、どうぞ続けてください」とお願いした。

「このようにしておったのじゃが、あるとき、ミミナガモフモフ族に不幸がおこった」とフリュップスはため息をつきながら話を続けた。「この年は嵐、台風、干ばつ、津波という悪条件がすべて重なって起こったのじゃ」

今フリュップスが言ったたくさんのよく分からない言葉を聞いて部族のみんなは少しあぜんとしたが、もし王がサッと席から立ちあがってどこかに行ってしまったら、この面白い話の続きをしてくれる者はいなくなってしまうので、誰も王様の話をさえぎらなかった。

「その年は森には食料がまったくもって不足しておった。草もキノコも木の実もなかった」王は左右にゆれながら歌でも歌いだすかのような低い声で語りを続けてた「みんながおなかをすかせてお

った。オオカミもイノシシもヘラジカもウサギも」

「ということは、ゾウもおなかをすかせていたということですか！？」さきほどと同じ細い声の持ち主が静かに言った。

フリュップスは顔をゆがめ、部族を厳しい目で見て黙ってしまった。

「おい誰か、あのウンザリさせるヤツを追い出してくれ!!!アイツにゾウさんをあげてやってくれ。このお利口さん野郎に！」周りにいた者はカンカンだった。

「その年はミミナガモフモフ族も飢えていた。予備でとっておいた食べ物も底をつき、倉庫には穀物もまったくなく、質屋に行っても何もなかった」落ち着き払って王は話を続けた。「ミミナガモフモフ族は餓死して滅びることを避けることができなくなっておったのじゃ」

最後の言葉を聞いた後、部族のみんなは息を止めて固まってしまった。木の上のキツツキも木を叩くのをやめて恐る恐るこちらをながめていた。

「そのときのことじゃ、『スコンブレイ』という者が名乗り出て突然『ミミナガモフモフ族はひもじい思いをして飢えを耐える必要なんてないんじゃないか？』と言ったのじゃ。この者は部落を離れ、もう宝物を人間に運ぶのはやめようと言うつもりだったのじゃ！この者についていきたい者はついて行くことができた」フリュップス王はため息をつき、ネズチョークたちの頭の上の遠くの方を見ていた。

ネズチョークたちは一斉にフリュップスの視線の方向に顔を向けた。しかしそこには何もなかったので再び話をしているフリュップスの方に顔を向けた。

「ミミナガモフモフ族の三分の二の者はスコンブレイの後に付いて行った。残りの者はワシのひいひいひいおじいさんである年老いたネズチコース王とともにそこにとどまった。それからというもの、スコンブレイを追った者は皆、スコンブレックと呼ばれるようになり、いつしかそれはクンブレックと呼ばれるようになった。そしてネズチコース王と一緒に残った者たちはネズチョークと呼ばれるようになった。そして獣たちは仲たがいをして二つの部族に分かれてしまった。クンブレックと名乗り始めた者どもは、どこか遠くへ行ってしまう、それからというものアイツらがどこに行ったか知る者はおらんのじゃ。また同じ時からキツネもワシもタヌキも森の中でクンブレックを見かけなくなった。

「っていうことはゾウも見かけなくなったってことですね！？」例の誰かが、同じ細い声で王に向かって静かに語りかけた。

「おい、なんなんだこのわきまえが悪いヤツは！？このお利口さん野郎にはウンザリだ、追い出そう!!!一体全体何回目だっていうんだよ！？」一族の怒りは限界に達していた。

フリュップス王はネズチョークたちに目を向け、その中からこのゾウが大好きなお利口さん野郎を探し、どうやったらうまく杖を投げつけることができるか考え始めていたが、お利口さんは見つからなかった。そうこうしているうちに怒りは沈んできた。

「そして今、やつらは現れたのじゃ。フクシクにできたアザから判断すると、クンブレックたちはわしらから離れていったあの日から全く変わっておらん。あいかわらず戦うのが好きなようだ」と言い、フリュップスは自らの演説を終えた。

フリュップスの言葉を聞き、ネズチョークたちは新たに知ったことの内容を話し合っ騒いだ。たくさんの方たち、特に積極的な方たちは、「犯人を探して、すぐに復讐しよう」と言っていた。しかし、

フリュップスは突然声を荒げ、杖で地面を叩きながら、昔に自分が部族の王として選ばれた理由を言った。

「結論を急ぐのはよくない。若い動物は、自分のポジションを理解しようとしたり、良い評判を得るために戦おうとしたりすることがよくある。じゃが、フクシクがしでかしたことを考えるのじゃ。何もないのに大騒ぎし、混乱し、あげくの果てに火のないところに火事を見る……こういった能力はどういう結果で終わるのかを皆の者にクドクドと言う必要はなかろう。かつての親族であるヤツらに次に会うときは、もっと友好的に接して、コミュニケーションを取ろうと努力したほうがよいと思うぞ。それにしても、長年行方不明だったあヤツらはこれまでどこにおいて、なぜ今頃出てきたのじゃろうか……」

## 第9章 ホムカとローザチカがネズチョークの村にやってきた

クンブレック事件から数週間後、ネズチョークたちにはまた変わった話があった。

その日の朝、太陽が村を明るく照らし始めると、すぐにフクシクは目を覚まし着替えを始めた。ベッドを整えて、ロッジから飛び出した。ジャンボとチュポックスの家の窓をノックした後、仲間たちを体操に誘った。ジャンボとチュポックスは兄弟で、フクシクにもかつてペルシクとプーシャという兄妹がいた。しかしこの二匹は何年も前に母親の言うことを聞かず勝手に森にキノコ狩りに行ってしまい、行方不明になってしまっていた。大人たちは長い間、二匹を探したが、見つからなかった。「おきろおおお！」とフクシクは命令口調で言った。それに対して、クシャクシャになった靴下が窓から飛んできた。そして「帰ってくれ！」「寝かせてくれよ！」というさげび声も窓から聞こえてきた。

しかし、フクシクは呼びかけに応じて飛んでくる物体をさらに2、3個粘り強くかわした。それから友だちたちを起こして外に出すことに成功した。フクシクはお気に入りのダンベルを手に取り、それを上げ下げしたり振り回したりし始めた。ジャンボとチュポックスは、重りを付けて運動するよりもストレッチするほうが好きだった。フクシクは自分のダンベルがとても好きだったが、ジャンボはフクシクのダンベルから逃げていた。さらにそれを恐れてもいた。というのも、ある冬、ダンベルがきれいに雪模様になっているのを見たジャンボは、キャディーのようなこのおいしそうなお菓子を食べてみることにしてしまったのだが、雪模様に見えたところはすぐになくなってしまい、それだけでなく舌が金属に一瞬にくっついてしまったのだ。かわいそうなジャンボを救うために、友だちたちはまず頭を引っ張った。しかし全然ダメだった。そこでやかんの熱湯をダンベルにかけ、その上でくっついてしまった舌を引っ張ったのだ。その結果、ジャンボは1週間しゃべれなくなってしまった。さらに歩くときは腫れた舌を出していた。他のネズチョークたちはこの話を覚えていて、時には笑い話にしてもいた。考えてみればあまり面白い話でもないはずなんだが。

三匹が体操を始めた頃、集落の入り口で何かさざわぎがあった。ジャンボとチュポックスは体操をやめてそっちへ駆けていった。フクシクは二匹を体操の場に戻したいと思って後を追っかけていった。近づいてみると、ぐるっとネズチョークたちに取り囲まれた真ん中に二匹の昔からの友であるホムカとローザチカ(\*)がいるではないか。

動物たちはボロボロの服を着て、疲れた顔をしていた。ホムカはやせてもいた。

「ホムカ！ ローザチカ！ 何が起こったんだ？ どうやってここまで来たんだ？」フクシクは驚いてたずねた。

「水を……」ハムスターのホムカはうめき声を返した。すぐに水が入ったカップが渡された。

「そ、それと、た、食べ物を……」ハムスターは水を飲みながらうめいていた。あるネズチョークはリンゴを、別のネズチョークはパンくずを与えた。するとそれは瞬時にホムカの口の中に消えていった。

「チ、チーズ……」ホムカはまたうなった。

それをさえぎってチュポックスが尋ねた「なあ、何があったんだよ、教えてくれよ」

「いや、とてもとても恐ろしいことが起こって……」ホムカは泣きながら草むらに倒れ込んだ。前足で心臓のところに触り始めた。水を飲み終えたオウムのローザチカはホムカが悲劇の役を演じ始めたことと、それを始めると長くなりそうだということに気づくと、説明の役を引き受けた。

「あなたたちの村を探して一晩中林の木たちと戦いながらここにやってきたわ。」

「どうして家を出たんじゃね？」長老のフリュップスがそう尋ねた。

「考えると心が折れそうになる……」ハムスターのホムカは、詳しくは語らずにうめき声をあげた。再びチーズがほしいとも言っていた。ローザチカは説明を始めた。

「私たち、ソフィーがパパに『犬を飼ってほしい』、『ハムスターやオウムにはもうウンザリ。売るか人にあげるかしてちょうだい』とお願いしているのをたまたま耳にしちゃったのよ。パパはソフィーに『この動物たちだって生きているんだ。しかも私たちの友達じゃないか。だからこれからも飼っておくべきだろ』と説明しようとしたけれど、ソフィーはどうしても納得でなくて、しまいには泣き出してしまったのよ」

「ああああ、そんなの我慢できない……」とホムカはコメントした。

「それから、夜になったわ。私たちだって飼い主にうんざりしちゃったから、そのまま家を出てしまおうって考えたのよ。でもね、魚たちは水槽に入ってるから、一緒には連れてこれなかったの」とローザチカは悲しそうな声で話をまとめた。「あなたの村に住ませてくれない？」と期待を込めて尋ねた。

「もちろん。もちろんだとも。村には好きなだけ住むがいいさ！」フクシク、ジャンボ、チュポックスは嬉しそうに声を上げて、二匹をフクシクの家連れて行った。

ホムカは首輪を外した。裏側には小さな字で「やあ、僕の名前はホムカ！ あなたがこれを読んでるっていうことは、僕は迷子になってしまっているっていうことです。私は人間の言葉は話せませんし、住所も覚えていないので、どうかヴォルニー市のミール街の7番のかわいいソフィーちゃんに連絡して、私をそこに戻してください。あなたはお礼をもらえますし、僕はおいしいビスケットがもらえます！」ホムカはその首輪を見て、ため息をつき、そしてそれを草の茂みに投げすてた。

「さらば、これまでの生活よ。こんなものこっから捨ててやる。もう戻れないし戻らない、背水の陣ってやつだ」と叫ぶハムスター。

「そうだ自由だ！」ジャンボはその肩を叩いて励ました。

その時から、ホムカとローザチカはフクシクの家に移ってきた。三匹は兄妹のようになった。そんな形で、家で飼われていたペットは「森の住人」になったのである。

(\*翻訳者注：原文ではこの章を通してローザチカは本名である「ローズ」で呼ばれているが、混乱をさけるため「ローザチカ」で統一した。)

## 第10章：畑を耕すフクシクとその仲間たち

それから何日かたった。かなり早朝のことだった、ホムカのいびきとローザチカの寝息で目が覚めたフクシクは、目を開けて天井を見つめていた。

「今日は何か良い行いをしなくては」という思いが頭をよぎった。「そして、良い行いはたくさんあったほうがいい」と考えを広げていった。この日はいい天気になりそうだというのは良く分かっていた。

フクシクは、横向きに寝直して、自分に何ができるのかと考えていた。

ホムカは「カ、カリカリのパンのみみ……」と言いながら、ゴロゴロしていた。フクシクの心は揺れ動いていた。着替えてベッドを整えて、いつものように体操をしに行った。ホムカはいつもすごく疲れていると言っているし、ローザチカはよく空を飛びまわっているので、体はスリムだし、翼もしっかりしているといった具合だったので、このハムスターとオウムは体操には参加させないことにしていた。

今日もまた投げられてくる靴下とかスリッパとか壺なんかをよけながら、フクシクは仲間の二匹を起こしてトレーニングを開始した。そしてジャンボとチュポックスに今日は自分には何かの役に立ちたいという気持ちがあるということを伝えた。

「それで、まあもちろんなんだが、オマエたちの協力が必要なんだよ」とフクシクは付け加えた。

「ああ」とチュポックスは何度もうなずいていた。今日はいつもよりたくさんしゃべりそうな感じだった。

「で、何をしようって言うんだい？」ジャンボが聞いてきた。

「森のはずれに、ちょっとした谷があるだろ。その近くに小さな土地があって、何人かの農民が馬と犁(スキ)で畑をたがやしているんだ」とフクシクは説明を始めた。熱心に話続けて「そいつらが昼ごはんを食べに行っているあいだに、オレたちで土地をカンペキにたがやす。帰ってきたやつらは大喜びってわけだ」としめくくった。

「ホムカには何か言ったかい？」とチュポックスが尋ねた。

「あいつ、森を旅した後だからまだ体が弱っていると言っているけど、まあお願いしてみたらどうよ？」

「いやいや、僕はアーティストであって、農民なんかじゃないんだけど……」とふとんの下から弱々しい声が聞こえてきた。そして「このおててはステージで使うためにあるの！」とキツパリと言って、ふとんの中から手をだした。

ジャンボはこれには反対だったので「森の中にはステージなんてないんだぞ。そこにあるのは野生動物のたくましい生存競争だけ。生き延びるためには、苦しい生活を覚悟しなくっちゃいけないんだ」と言った。「さあさあ、シーツをどけて、一緒に来るんだ！これからの冒険は、お前さんの足にいい感じの刺激を与えるものなんだ、そんな足だってきっと強くなるだろう」

ホムカはだらっとした伸びをしながら「トホホ、なんて厳しい生活なんだ」と答えた。「やれやれ、周りの環境に合わせてやっていかないとダメってかあ」ホムカはブカブカの短パンを履いて、みんなと出かけた。

正午頃、一行は森のはずれの方に向かって出発した。それを見送ったのは、フクシクの母親であるスクラブシュカおばさんだった。スクラブシュカ、つまり「ゴシゴシする女」と呼ばれていたのには理由があった。非常に硬いタワシとブラシでフクシクとペルシクとプーシャを洗っていて、子供たちが風呂に入るときはいつも村中に大きな叫び声が鳴り響いていたからだ。ペルシクとプーシャが森の中に消えていってしまった今、硬いタワシに悩まされているのはフクシクだけだった。

森のはずれに到着した。みんなは小さな木の陰に隠れて二人の農民の仕事ぶりを見ていた。一生懸命働いて疲れた農民たちは、昼食のために休憩をとるところだった。

農民たちは道具がついたままの馬に水の入ったバケツと干し草を与えた。それから大きな樫の木の陰に入った。午後になった。農民たちは昼寝をしようと思い、麦わら帽子を深くかぶって、ゆったりと眠りはじめた。

ネズチョークたちとホムカは、干し草をおいしそうに食べている馬にゆっくりと近づいていった。わき腹がやせた灰色の年寄りの牝馬で、茶色の斑点が入っていた。ネズチョークたちは、ホムカをおんぶして馬によじ登った。それから馬をどうやって操るか考えた。馬は、動物がよじ登ってきているのを感じて警戒した。そして耳をピンとさせて干し草を食べるのをやめた。

「フクシク、次はどうする」とジャンボが聞いてきた。

「えーと……。いや、実はこういった『歩く移動装置』を運転するのは初めてなんだ」フクシクは次の行動を考えていなかった。

「馬にどう動けばいいか命令を出したらいいんじゃないか？」チュポックスはサクッと提案した。

ジャンボは「そうだな。まあいつも、『歩け』『走れ』『止まれ』とか言われてるからな、馬は」と付け加えた。

「つまり耳に向かって命令を出さなければいけないってことだな」とフクシクは頭をポリポリかきながらそう言った。それから馬を見て「でもさ、この馬には耳が2つあるだろ。だったら命令出す人は2人必要ってことだろ」とつけ足した。

言っていることを理解したジャンボは「なるほど、左耳に命令すれば左に、右耳に命令すれば右に曲がってくれるってことか」と言うと、馬の首を頭の上の方によじ登っていき、それから左耳のそばに座った。

ホムカは「いやいや、とんでもない。取り返しのつかないことになると思うよ」とホムカは言った「誰にとってって、そりゃ、僕たち全員にとってだよ！」

チュポックスは「心配すんなよ。オレたち森の住人がどうやって森で起こる困難に立ち向かっていくか見せてやるよ」と言い、ホムカを安心させようとした。

馬が警戒していて、まるで蒸気機関が運転を開始するときのように全身を細かく揺らしていた。鼻の穴から蒸気が出てさえいたら、もう蒸気機関と寸分の違いもない見た目だった。

「よし、行くぞ！オレが右耳、左耳はジャンボ、おまえだ。そしてチュポックス、おまえは前を担当するんだ！」と叫んで、馬の右耳のところに座った。

「この馬のブレーキはどこにあるっていうんだい？どうやって止めるのか」とチュポックスは心配そ

うに叫んだ。

しかし、その声は誰にも届かなかった。フクシクとジャンボは3、2、1、と数えると同時に「行けえ！！」と両方の耳に向かって叫んでいたのだ。老いた牝馬は驚きのあまり後ろ脚で立ちあがり、それからうなり声を上げて突進しはじめた。馬に取り付けられた犁は地面を深くひっかいて、10メートルほど土を耕した。そして犁は水から飛び出るイルカのように地面から飛び出した。恐怖に狂った馬は谷の斜面を駆け下って行った。馬はものすごい勢いで土を耕していくのでネズチョークたちは気絶寸前だった。しかし馬の上で騎手のようにピョンピョンと跳ねさせられたのですぐに正気に戻り、そして馬を止めるために叫んだ。

「おい馬よ、止まってくれ!!!」馬の右耳に向かってフクシクが叫んだ。

「止まれっ言ってるんだ。とーまあーれえー!ストオオオッウ!!」と、左耳に向かってジャンボが叫んだ。

「なあみんな! コイツの馬力を弱めてくれえ」チュポックスは目を丸くして恐怖の声を上げた。ホームカは黙って前足で馬の毛をつかんでいた。そして「森の住人」が本当に困難を乗り越える力を持っているのかを疑いながら見ていた。

馬はスピードを上げて谷の斜面を駆け下りていった。犁は役立たずの鉄のように牝馬の後を飛び跳ね、生き物のように草や茂みや若木をきれいに刈り取り、曲がりくねった更地を残していった。ふとした拍子に犁は大きな木に引っかかり、折れて枝からぶら下がってしまった。それからさらに馬はブルルンといかないた。ネズチョークたちはまるで木にぶらさがっていた熟れすぎの果実が落ちるように落下してしまった。数十メートル走ったところで馬は止まり、鼻息を荒くして全身を震わせていた。草むらに横たわっていたネズチョークたちとホームカは、溪谷の斜面にいる牝馬に向かって走ってくる農民たちを見て、急いで近くの茂みに身を隠した。農民たちは、駆け寄って馬の様子を見た。そして「あの馬はウマアブに噛まれて痛かったからビックリして逃げ出したんだろう。そうに違いない」と言って、馬を連れ戻した。しかし、農民たちは5歩も歩かないうちに、黄色く輝く何かが、黒くて脂ぎった土の塊の中にあることに気がついた。腰をかがめてみると、驚くべきことにそこには金貨や銀貨がたくさん中に入っている割れた壺があったのだ。農民たちはこの上なく喜んだ。喜びのあまり飛び跳ね、抱き合い、帽子を上投げて、汗をかいて怯えている馬の顔にキスをした。馬は首を振って、なんで農民たちは喜んでいるのか、なぜ谷の斜面を勝手に耕したことは叱られなかったのか、理由がわからなかった。

フクシク、ジャンボ、チュポックス、ホームカはさらに数分間隠れて、農民たちが喜んでるのを見はじめた。しかしあざやタンコブができてるのは自分たちでもよく分かっていたので、痛みをうめきながら足早に村に戻っていった。フクシクは、「速度のスイッチを間違えて操作した」のはチュポックスだったということを他の仲間に証明しようとしたが、他のみんなは怒ってしまい、フクシクを殴ろうとした。でもすぐに仲直りし、数分後には「オレたちは『無敵の馬乗り』だ」と言って笑い合っていた。なぜかと言えば、結局のところ、畑を耕す作業は満足いく形で行われたからだ。しかしフクシクは「村人たちは宝物を見つけられたのは本当は誰のおかげだったのか分かっていない……これは残念だな」と嘆いていた。

## 第 11 章 ホムカとローザチカは家に帰って行った

ホムカとローザチカが村に住み着いてから数週間が経った。ネズチョークたちは新しい住人のことをとても喜んでいて。ホムカは、みんなを楽しませる天性の才能を持っていた。いつもショーを行っていたし、信じられないほど多くの芸を知っていた。一方、ローザチカは、村の上空をパトロールし、集落の周辺で起こっていることを長老たちに報告していた。しかし、こんなのどかな雰囲気は長くは続かなかった。ある朝、一匹のネズチョークが、森のはずれで女の子を見つけたと言ってきた。その子は森の中を歩きながら迷子になった自分の友達、そう、ホムカとローザチカのことを鳴き声で呼んでいたとのことだった。パパもママも一緒にいて、ハムスターとオウムを探していた。「あああ」ホムカは草むらに腰を下ろし、心臓のあたりをマッサージし始めた。「心の古い傷がズキズキするよ。ローザチカ、みんな、僕たちはどうしたらいいんだろう？」

ローザチカは翼を揺らした。

部族は集まって会議をしていた。フリュップス王が話す番が来ていた。長い間、杖に寄りかかって物思いにふけり、足は磁石で踊る人形のようにになっていた。フリュップス王は最近よく体を鍛えているので体調が良く、真夏にはダンスフェスティバルを開催しようと計画しているほどだった。そしてフリュップス王はとうとう口を開いてこう言った「ローザチカとホムカは、私たちにとって家族のような存在であり、対等な仲間でもある。じゃからこそ、ここに残るか、人間のもとに帰るかは、自分たちで決めてもらうべきなのじゃ」。そしてこう付け加えた「もちろん、お前たちがいなくなるようなことがあればワシもさみしいんじゃが」。目には涙が浮かんでいた。ホムカも涙を流しながらスピーチを聞いていた。ネズチョーク族全員はブツブツ言っていた。「どうか村に残らせてやってくれ！」「俺たちの家はお前たちの家だ！」という叫び声も聞こえてきた。

ホムカは魔法でも使ったかのようなしぐさで前足から青いハンカチを出し、それを振って、みんなに話を聞いてもらいはじめた。

「みなさん、本当にありがとう！どうすべきかを決めるのは 僕とローザチカにとってはむずかしいな。だから朝まで話し合いをして、それから決めさせてくれよ」。

翌日になった。長い時間悩んだ末に、オウムとハムスターの 2 匹は結局帰ることにした。2 匹は部族の一匹一匹にハグをして、長い間別れを惜しんだ。

フリュップス王は「ホムカ、おぬしは今日から人間のところでスパイになって我々に連絡をするのじゃぞ」と期待を込めて言い、そしてぽっちゃりした友だちを抱きしめた。

「歴史で最高のスパイハムスターになります！」とホムカは宣言した。「まあ少なくとも、一番気が利いて、一番おしゃれなスパイハムスターになります」

フリュップス王はオウムに別れの言葉として「ローザチカ、ホムカのことを頼んだぞ」と言った。ローザチカは謙虚にうなずいた。

ネズチョークたちに連れられて二匹は森のはずれにたどり着いた。人間はいなかったが、人間がいた跡はたくさんあった。動物たちは人間の帰りを待つことにして、森のはずれで小さなたき火を囲んで、一緒に冒険した思い出話をしながら夜を過ごした。朝になると人間たちがやってきた。そして再びローザチカとホムカのことを大声で呼び始めた。

「さよならとは言わないよ！」とハムスターが叫んで、仲間を一人ずつ抱きしめた。そして、ローザ



チカもみんなを抱きしめた。

「おまえたちはもう本物の森の動物だ。そうだっていうことと、それと森ってというのは怖がらなくっていいものなんだっていうことを忘れないでくれな」去っていくハムスターにジャンボが言った。

「お魚さんたちにもよろしく言ってくれ！」とフクシクは叫んだ。

ハムスターが別れを告げて前足を振ると、ローザチカも翼を振った。しばらくして人間たちは二匹を見つけた。女の子は喜びの声を上げてペットたちに駆け寄った。そして申し訳なさそうに声を発しながら二匹を抱きかかえた。ネズチョークたちは再会の場面を数分間見ていたが、満足したので森の奥へと帰っていった。

## 第12章 クンブレック族との新たな小競り合い

クンブレック族と小競り合いがあったことは、次第に忘れられていった。ネズチョークたちは執念深かったり攻撃的であったりはしないので、これまでは他の森の住人たちとは平和に暮らしてきた。どうしても解決できない争いがあると、部族全体が一丸となって強大な力を発揮して解決してきた。ネズチョークたちは大きさも、素早さも、機敏さも今一つだったが、団結力や規律、そしてチームスピリットがあったので戦いには勝利してきた。ネズチョークたちはまるでやって来た敵を攻撃して追い返すために作られた止めることのできない戦闘マシンのようだった。ネズチョークたちからそういった攻撃を何度か受けた後は、最も大きくて危険な森の獣でさえ、2回目以降はネズチョークたちには接触しないようにするのだった。しかし森の中には、ネズチョークと同じか、もしかしたらそれ以上に団結している種族がいた。

たんこぶだらけで泣いているボストリックが村に駆け込んできたときに、クンブレックの存在が再び思い出された。ボストリックは昔からいじめられっ子だったが、非常にプライドが高くって、すべてのネズチョークを頭のいい人、つまり「オストリック」と、頭の悪い人、つまり「マヌケー」に分けていた。もちろん、ボストリックは自分のことを「オストリック」と思っていた。ボストリックは前に自転車を作って、自分のことを「車輪の上の稲妻」と呼んでいたことがあった。しかし自転車は木にぶつけてしまった。それからはネズチョークたちはボストリックのことを「自転車マヌケー野郎」と呼んでいた。

ボストリックは、泣きながら頬の涙をぬぐっていた。クンブレックが急に襲ってきて、村に運ぼうとしていた数えきれないほどの宝物をすべて奪い、平手打ちをして笑いながら去って行ったと言っていた。

ネズチョーク族は、ボストリックが何か価値のあるものを持ってくることがあるだなんて思っていなかったし、ボストリックはクンブレック族だけではなく、誰とだってしっかりと話をするのができないような者だとも思っていた。しかし、ネズチョークたちは他の部族が関与していると考えられるこの状況を見逃しできなかった。問題は、どうやって犯人を見つけるかだった。

フクシク、ジャンボ、チュポックスは偵察役に立候補した。ボストリックは、泣きながら二人を原っぱの方に連れて行った。ボストリックが言うにはその場所でクンブレックから言われもない理由で何度も殴られたとのことだった。ネズチョークたちが事件が起きた現場にたどり着く前に、ボストリッ

クは背の高い茂みの方を指さすと「もうこりごりだ。ここにいるのはつらいと」言って村のほうに戻って行ってしまった。ポストリックが帰りながら足で舞い上げた砂ぼこりは地面に落ちた。この場所に残っていたネズチョークたちはくしゃみをしたり目をこすったりしていたが、すぐに現場の偵察を始めた。

チュポックスは草むらの中にはっきりと見える足跡を指で差し、それを自分の肉球の形と比べてこう言った「オレたちと同じ足跡がたくさんある」

「足跡のうちの一筋はオレたちの村の方に向かっていて、他の一筋は林の方に向かっていて」とチュポックスは付け加えた。

「あっちの方にはこれまで行ったことないな」とフクシクは考え込んだ。

勇敢なネズチョークたちは、小枝で体をおおって、さらにその上から葉っぱを振りかけて姿が見えなくなるようにして、それから森の道を歩き始めた。時には足跡が消えてしまうこともあったが、三匹は折れた小枝やほんのりとただよこの者のにおいをたよりにして行くべき方向を見つけた。うっそうとした林を抜け、小川が流れているところ渡ると、谷への下り坂に出た。それから反対側の上り坂を用心深く登っていくと、下の方に村があるのが見えた。村は丘と深い森に囲まれた、心地の良い場所にあった。この村は、家々の配置や建物の大まかな作りを見ると、ネズチョークの村に似ているように見えた。

「おい、なんだかたくさんいるじゃないか」チュポックスは感心して口笛をならした。その谷間には、確かにネズチョークにそっくりな生き物たちが生息していた。

冒険心にあふれるジャンボは「なんだこの村か。気球から望遠鏡で見たことがあるし、どうやったら行くことができるかもともと知っている」と言ったかと思うと、早くも戦ってやろうという姿勢になっていた。

「降りていって話をすればいいんじゃない」フクシクが提案した。

「いや、それは面白くない！」ジャンボは反対した。

「動くな、喋る枝たち！」突然、背後から声が聞こえてきた。「小枝を持ち上げるんだ、そうだ、小枝があたしたちから見えるようにするんだ。」

捕まってしまった3匹は広場に連れて行かれた。その広場はネズチョークたちの集落の中心にある集会のための広場と瓜二つであった。そこでようやく、周りを見たり動いたりすることが許された。

「お前たち、前に会ったメスたちじゃないか！」小枝を外したジャンボはそう叫んだ。3人を連れてきたのは、クワスーリャ、マバーシャ、ククビンバだった。

ネズチョークたちがなんだか怪しい感じだったのを不審に思ったクワスーリャはどこかに走っていき、すぐに年老いて堂々としたクンブレックを連れて戻ってきました。頭には威厳のある白髪があり、フリュップスとよく似た冠をかぶっていた。

そのクンブレックは響き渡る声でこう言った「よく来たな、侵入者たちよ。ワシはこの部族の長であるフリャームス酋長だ！」

「おい見ろよ、フリュップスよりもカッコいいじゃないか」とジャンボは言った。

「酋長さん、こんにちは！」ネズチョークたちはあいさつをした。

「フリャームスだなんて、なんて素敵な名前なんでしょう！」とチュポックスは酋長のことをほめた。

「ああ、ありがとう」とフリヤームスはうなずいた。「娘のクワスーリヤが言うには、以前にもおぬしらと会ったことがあるとのことじゃが、その時の出会いはあまり良いものではなかったと聞いておるぞ」

「まあ、確かにそうです」とフクシクはうなずいた。

「しかしなんでわたしのことを探そうとしたのじゃ」と酋長は尋ねた。

「今朝、あなたたちの誰かが私たちの部族の仲間をおそって宝物を奪ったんです」とフクシクは答えた。

「そんなことはない」「先に手を出したのはお前の仲間だ」という声が聞こえてきた。

「お前の仲間は何か安ぼったいものを運んでいたけど、別のクンブレック 2 匹が指輪と光るコインを引きずって集落に入っていくのを見たから、そっちを奪おうとしたのよ。宝物が私たちのところにあるのはそういう理由なの。あんたたち、生意気な仲間のところに帰りたいんならそうすればいいし、あたしたちに喧嘩を売りたいんならどうぞご自由に！」

ネズチョークたちは解放され、日没前には自分たちの村に到着した。たいまつとロウソクの灯りの中で、ネズチョークたちは集まって、何が起きたのか、そして次に何をすべきかを話し合った。

いつものように意見は分かれた。ある者は「今こそ復讐すべきだ」と叫び、別の者は隣の部族と交渉することを主張した。また、ある者はよそ者には何も求めず、ただ無視をして以前のように生活することを提案した。クンブレックのふざけた態度に怒った者もいたし、ただちよとした冒険をしたかっただけの者もいたりして、様々な者がいた。フリュップスはクンブレック族と和平を結びたかったが、圧力を与える多数派の要求に応じざるを得なかった。

「おぬしら、闘いたいのか？」フリュップスは群衆の騒ぎ声を抑えようとしながら叫んだ。「わかった、でもおぬしら勝ちたいのだったら、わしのやり方でやらせてくれ！誰も怪我もあざもひっかき傷も作らずに、ただただクンブレック族を怖がらせる方法がある！」

### 第 13 章：炭酸飲料ロケットの攻撃とソーセージ空軍

赤い戦闘用の短パンと赤い上着、そしてたくさんの葦のストローとイチゴやブルーベリーのようなベリー類の果実 — これがネズチョークの装備だった。葦のストローの中にベリーをたくさん入れておき、頬をいっぱい膨らませて思い切り息を吹いて、ベリーを遠くへ思い切り飛ばすというやり方だった。敵の前に立った状態で、ベリーを葦の奥に押し込み、さらにできるだけ多くの空気を口に集めるという動作にはたくさんのスタミナが必要だったので、ネズチョークたちは毎日この技を練習した。これを練習していたネズチョークたちは仲間の間では「ベリー吹き」と呼ばれるようになった。

また、ネズチョークは大きなパチンコも持っていた。松ぼっくりを敵に向けて発射するものだった。パチンコのゴムを引くには 2、3 匹のネズチョークの力が必要だった。これを担当しているネズチョークたちは「松ぼっくり打ち」と呼ばれるようになった。

ついにネズチョークの軍隊が、角笛を吹いて、太鼓を鳴らしながら行進する日がやってきた。雑木林の手前で、軍は二手に分かれ、一つの隊は谷の右手側を沿って歩いて行った。

「勝つのは俺たちだ!」ネズチョークたちは声を張り上げて戦いの歌を歌った。

フリュップス王を中心とした本隊が動き出した。王は丘の上に直属の部下を配置した。部下たちは大声を上げ始めそしてクンブレック族に戦いを挑んだ。長いこと叫ぶ必要もなかった。すぐに青い短パンとジャケットに身を包み葦の棒やパチンコを肩に担いだフリャームスの軍団が村から出てきて、そして行進を始めた。クンブレック族はすぐに丘に登り、ベリーの実を投げられる距離にいと、ネズチョークのまばらな先発隊にベリーの実を投げ始めた。この攻撃はかなりうまくいった。しかし、ここでフリュップスが本隊を投入し、ベリーと松ぼっくりを打ち合う激しい戦いが繰り広げられた。両軍はお互いに顔を合わせ、金切り声を上げ、騒ぎ、叫んだ。

老フリュップス王は年齢こそ若くはないが、優れた将軍であり、そのことは部族の誰もが認めていた。王は多くの小競り合いを経験しており、経験豊富で先見の明があり、そして冷静沈着な面もあった。

「さて」王は、さっきフクシク、ジャンボ、チュポックスの3人が見たクンブレックの村とその周辺の地図を地面に小枝で描きながら、「村は警備が厳重で、さらに守りやすい。だから攻撃するにはふさわしくないのお」と話し始めた。「村の前に立つ丘に我が軍の一部を配置しよう。そうすれば敵の軍が出てきたときには強制的に鉢合わせになる。クンブレック族はわたらの軍を見て兵の数が少ないとだまされる。すぐに丘に登り始めるじゃろう。そしたら、わたらは残りの4分の3の軍を投入するのじゃ。そうすれば敵の注意はそっち向かうじゃろう。その時、小部隊が戦闘の場から離れて、ロープを伝って丘を降りて、敵を横から攻撃する、とこういう具合じゃ」

「偵察部隊になってもいいと思う者はおるかの？」王はみんなを見回していた。

この時、フクシクは自分の周りを飛んでいるハチを振り払っていた。フリュップス王は、フクシクが前足を振っていたので、偵察部隊で活躍したいという気持ちで手を挙げていると理解した。

そこで王は「よし、おぬし、ロケットのパイロットになるがよい。高速で空中を偵察するのじゃ！」とおごそかに言った。「うまくやるじゃぞ」

「え、あ、はい、分かりました、王様!でも、どうやって偵察を行うんですか」ハチに気を取られて王様の説明を何も理解していなかったフクシクはそう尋ねた。

フリュップス王は深く息をして、よく考えた上でこう叫んだ。

「先祖代々の言い伝えでは、甘い炭酸の飲み物が入っているペットボトルにメントスを入れると、2秒後にはペットボトルから炭酸が勢いよく出てくると言われておる。ペットボトルのロケットに偵察を行う者をパイロットとして乗せれば、炭酸の噴射でボトルもパイロットも空に浮くことができるのじゃ」

「え、おいらがボトルに乗るっておっしゃるんですか?!」フクシクは青ざめた。そして王様の前にひざまずいた「ボトルって……爆発しないですよ……」

「大丈夫じゃ、すべてがうまくいく」王はそういつてはげました。「おぬしはヒーローになれるのじゃぞ!？」

ジャンボやチュポックス、その他のネズチョークたちの笑い声に包まれたフクシクはよろめきながら兵器を取りに行った。

5分後にはすべての準備が整った。炭酸飲料の入った大きなボトルが台の上に置かれ、フクシクはボトルに縛られていた。そしてメントスを投げ入れる準備がなされていた。

「見ろ！クンブレックが気球を上げたぞ！」空のほうを指さして突然ネズチョークの一匹が叫んだ。ネズチョークの部族全員が顔を上げた。ソーセージの皮に空気が入れられていて、それにはクンブレックの入ったカゴがついていた。そしてカゴは空に浮かんでいた。

「ハッハッハッハ」ネズチョークたちは笑っていた。「見ろよ、クンブレックたちには立派な空軍があるじゃないか！ソーセージ空軍だぜ！あんなウイナーソーセージの気球で来られたら俺たちは負けだ！」

ソーセージの気球がまんまるにふくらんでいるのがあまりにもおかしくて、みんなは目を丸くしていた。近くを飛んでいたカラスもそれを見て、勢いよく松の木にぶつかった。松葉や松ぼっくりが落ちた。

ソーセージ気球のカゴからネズチョークの軍の位置を見下ろしたクワスーリャは、赤い手旗信号 2 本を振りながら、仲間たちに偵察の結果を伝え始めていた。

「おい、あのメス、偵察してやがる!!!」何匹かのネズチョークたちが悲鳴を上げた。「それは反則技じゃないか！？あいつのどこから俺の軍隊は丸見えじゃないか!!!」

それを聞いた別のネズチョークは「急いでフクシクを縛るんだ！我らの偵察部隊も出動させないと!!!」と声を上げた。

フクシクはさらに顔色が悪くなったが、できることはやるという態度で持ちこたえた。ネズチョークたちはペットボトルの飲み口にメントスを入れて、すぐにフタを閉めた。

「王様、いつフタを開けますか」とフリュップスに尋ねる声。

フリュップスは王のマントの下から砂時計を取り出し、それをじっと見つめながら唇を動かしていた。

フリュップスは「3 つ数えたら、開けるのじゃ」と命令を出した。「1、2」

部族全体が静まり返る中、フクシクは恐怖で静かにうめき声を出し始めて、そして急に気が付いてこう言った。

「ちょ、ちょっと待って、どうやったら空から地上に戻れるんだ？まさか誰もそんなこと考えてないなんてことは…。

「3!!!」フリュップスは大声を出し、そして前足を振った。

ネズチョークたちがフタを開けると、フクシクは恐怖の悲鳴を上げた。大きな音を立てて吐き出される強力なジェット噴射が炭酸飲料のロケットを上へ上へと運び、周囲に立っているネズチョークたちに甘ったるい泡を浴びせた。

「確かに、フクシクはどうやって空から地上に降りてくんだろう…」とジャンボは疑問を声にした。しかし、その声を聞く者はいなかった。

そしてフクシクの炭酸ロケットはグルグルと回転をしながらクワスーリャの風船に向かって一目散に飛んで行った。

クンブレック族は、フクシクが乗っている炭酸ガスを吐き出すロケットを見てびっくり仰天し、叫び始めた。そして前足を振ってクワスーリャの注意を引いた。しかし、クワスーリャは偵察で得た情報を送るので手一杯だった。そしてフクシクの乗ったロケットがすぐそばに来た時にやっと身の危険に気づいた。

クワスーリャは恐怖のあまり前足で顔をおおってしまい、旗を落としてしまった。炭酸を吐き出す口

ケットはソーセージ風船にゴゴゴという音を立てて突きささった。フクシクをボトルに縛っていた紐はちぎてしまい、フクシクはカゴの方にブっ飛んでいった。そしてクワスーリヤの足元に倒れた。クワスーリヤは嫌な顔をして招かれざる客が一体全体どうやって自分の気球のカゴの中に入ってきたのかその理由を聞こうとしたが、そうこうしているうちに衝撃で穴が開いたソーセージの気球が空気を噴き出し始めた。カゴは大きく傾いた。クワスーリヤはあやうく落ちそうになったが、カゴのはじっこを二つの爪でつかんだ。

クワスーリヤは「マ、ママー、たたたた、たすけてー!」と悲痛な声で叫んだ。

ネズチョーク族もクンブレック族も恐怖で凍りついた。空に浮かぶ壊れかけの気球の下の方にぶら下がっているクワスーリヤが悲鳴を上げながら全力で元のところに登って戻ろうとする姿をみんなが息を殺して見ていた。

フクシクがぶつかったときの衝撃は強かった。だからフクシクは長い間気を失っていたかもしれないが、クワスーリヤの叫び声ですぐに気を取り戻した。

瞬時にバスケットの端に駆け寄り身を乗り出したフクシクは、はるか下にある地面を見て、恐怖で後ずさりし胸を押さえた。しかし、クワスーリヤの必死の叫び声はフクシクの恐怖心を克服させた。フクシクは身をかがめ、クワスーリヤに手を伸ばし、力を入れてカゴに引き入れた。

クワスーリヤが救出された姿を見たネズチョークやクンブレックたちは手を叩いて喜びの声を上げた。クワスーリヤが前足をかわいらしく振ると、同じ部族のみんなが歓声を上げた。でもフクシクの方はというとカゴの床に座って恐怖で震えていた。

「なんという勇敢さ！英雄の名にふさわしい！」ネズチョークたちは、フクシクの行為について議論し、同意してうなずき、喜びをジェスチャーで表していた。

この間、ソーセージの皮に入っていた空気は減り続け、気球は下に降り続けていた。そして数分後にはカゴは地面に着陸した。クワスーリヤは飛び出してきて、あぜんとして見ていたみんなに向かって優雅にお辞儀をしたが、フクシクは恐怖に震えながらカゴの中に座り続けていた。しかし、フクシクと同じ部族のみんなは、それがフクシクの類まれな謙虚さだと理解していた。

ネズチョークたちは、ザワついたり、目で合図をしたりしてフクシクにこう言った「なんという謙虚さ！偉いぞ、フクシク！」

## 第14章：戦いは成立しなかった

「勇敢な英雄フクシク」がクワスーリヤの救出するのを見ているうちに、ネズチョーク族もクンブレック族も戦う気を失い、戦うのをやめてしまっていたが、戦い自体を完全に終わらせるわけにはいかなかった。クンブレックの村からはすでに多くの風船が飛びたっていて、爆撃部隊はそのカゴに座っていた。この部隊のクンブレックたちは、甘いシロップを敵の頭からかける訓練を受けていたり、松ぼっくりを敵に投げる訓練を受けていたりした。しかし、ネズチョークたちにとっては初めて風船を見たときよりもさらに驚いたことがあった。どの風船もソーセージやフランクフルトやレバーペーストの皮を使って作られていたのだ。

ネズチョークたちはなんともカッコ悪いこの武器を見て、最初はポカンと口を開けていたが、次の

瞬間には脇腹を押さえて大笑いしていた。しかし、しばらくすると、バケツに入った甘いシロップや松ぼっくり、松の葉などが頭の上から投げられて、もう笑っていることはできなかった。

「なんだと!!!やりやがったな！」ネズチョークたちは怒って、甘い炭酸飲料のボトルを並べ始めた。1分後には数十本のボトルが空に向かって発射され、すぐにヒューヒューと甘い泡を吐きだしはじめた。これらのボトルはソーセージの気球のあたりを大きく弧を描いて飛んでいき、ネズチョークやクンブレックには甘い炭酸が大量ぶちまけられた。甘い液体はずいぶんとたくさんバラまかれたが、そこからとても美しい2本の虹が空に向かって立ち上がった。これを見て両方の部族とも皆が口を開けて感激の声を上げた。

マバーシャとククビンバは、ソーセージ気球のカゴに座って虹を眺めていたが、そのときまちがえて甘いシロップや松ぼっくりを自分たちの仲間のクンブレックたちの上で落としてしまった。すぐに怒りの声が聞こえた。

「おい、だれに向けてシロップをかけているんだ、このクソガキ！」とある者は叫び、

「おい、どこを見てるんだ！」と叫んで、拳を振り回す者もいた。

さらに「おまえ、降りてきたらただじゃすまないぞ！」と怒っている者もいた。

マバーシャとククビンバは叫び声の内容をよく聞いておらず、戦いに勝った者を喜ばせるために持ってきていたたくさんの紙吹雪や紙テープを投げた。しかし、紙吹雪や紙テープは甘いシロップや松の葉でベトベトになっていたクンブレックやネズチョークたちの上からにふりかけられてしまったので、まったくもって場違いな様子になった。

「これは、何かね、余興のショーみたいじゃないか……」フリヤームス王は丘の上に立って双眼鏡でネズチョークの戦士たちを見ながらこうつぶやいた「ピエロ対お笑い芸人……」。

「これは戦いではなんかじゃない、サーカスのようなものじゃ……」フリユップス王も不機嫌そうに言った。「どいつもこいつも戦いの場ではなく、サーカスにいるべき者じゃ。まったくひどい兵隊たちだ……」

いよいよもってネズチョークもクンブレックも戦いの無益さが分かってきた。双方とも長い棒に白いハンカチをつけた代表議員を送り出した。

交渉を行う議員たちは、今日は両軍とも良い戦いをしたので、引き分けでもいいということで合意し、不可侵条約を結んだ。シロップでベトベトになって紙吹雪がくっついている動物たちの姿は笑いや冗談を呼び起こすものだった。ネズチョーク族もクンブレック族も顔を見合わせて笑っていた。クンブレック族は自分たちの集落の片付けを始め、ネズチョーク族は自分たちの集落に戻っていった。それぞれの部族は、自分たちが勝利者であり、相手は単なる戦争の初心者であり臆病者であると考えていた。フクシク、ジャンボ、チュポックスの3匹は、家までの長い道のりを歩き、それからベタベタになって汚れた服を洗濯した。

## 第15章 洪水

夏が終わり、秋になった。大雨が頻繁に降るようになり、ネズチョークたちは小屋の中の暖かいストーブのそばに長い間座っていた。雨が半日ほどやんだある日、偵察に出かけて行ったネズチョー

クたちが村に戻ってきた。そしてクンブレックの集落の近くの谷が厳しい状況になっているのを報告した。偵察隊の話によると、大雨の後、谷を流れる小川の堤防が決壊して、クンブレックの村は浸水する恐れがあるとのことだった。にっちもさっちも行かなくなったクンブレック属たちは、運河を掘って水を迂回させたり、ダムを作ったりしようとしたが、時間も体力も足りない様子だった。ネズチョーク族たちは、このニュースでもちきりとなっていた。

ボストリックやその他何匹かのネズチョークたちは敵が今苦しんでいて不幸であることを知ってあざ笑っていたが、ほとんどのネズチョークたちはきょうだい同然の仲間に同情していた。洪水は大きな不幸である。

老フリュップスは物思いにふけり、頭を動かしてどう決断するか考えながら中央の広場を歩いていた。突然、フクシクが部族に言いたいことがあると言い出した。フクシクは、村人たちが全員集まるのを待って、話すかどうか少し迷い、少しせき払いをし、それからシャツを直して、話はじめることにした。

「長老様は、オレたちがかつて一つの部族だったことを覚えている。確かに、ネズチョーク族とクンブレック族が別々に住むようになってから何年もが過ぎた。オレたちの毛とクンブレックたちの毛の色は少しちがうものになり、あいつらは遠くに住んでいて、仲が良いというよりはケンカばかりするようになった。ズボンのチャックのしめ方もあいつらはオレたちとは違う……。でも、中身はどうかというと、やはり同じ森の民なんじゃないか？だとしたら、森の仲間は助けなきゃダメだ。このままではクンブレックの村は水に流されてしまって、アイツらは家をなくしてしまう。冬はもうそこまでやってきている、新しい家を建てる時間もない。クンブレックは単に運が悪かっただけだ。ほっとくわけにはいかないんじゃないだろうか」とフクシクは感動的なスピーチをした。

「そうだ、さらにアイツらのそこには、かわいいメスもいる」と観客席からジャンボがつけ足した。

「さらに、王様の名前がカッコいい!」とチュポックスは付け加えた。

部族のみんなも賛成の声を上げた。年老いたフリュップスはフクシクをほめるような目つきで見ていた。ネズチョークは再び行進をはじめた。でも今回は戦いに出るのではなかった。

クンブレックたちは何日も前から、あふれた川の水を運ぶために一生けんめいに溝を掘っていた。クンブレックたちはひたすら掘っていたが、作業が思い通り進んでいないのは明らかで、いつ村が水びたしになってもおかしくない状態だった。万が一に備えて、貴重なものはすべて小枝で作ったイカダに積み込んであったし、住民を避難させるためにふくらましたゴムボートも用意してあった。ヘトヘトになって横になっている者も多かった。顔も上着もズボンも、液体のようだけれどベトベトする泥におおわれていた。仲間と一緒にシャベルで急いで溝を掘っていたククビンバは、ふと丘の上にいる動物の影に気づいた。前足をズボンで拭いてから、目をこすった。ククビンバにはネズチョークたちが現れたことが分かった。

「マバーシャ、クワスーリヤ、丘の上にいるヤツらを見て!あいつら何をしに来たんだ?」

「ああ、あのいじめっ子たち、アタシたちのことを笑いに來たんだ。さあさあ、ほっといて続きを掘ろう……」そうつぶやくと、地面に座り込んで、前足で鼻をさわりながらシクシクと泣きはじめた。クワスーリヤは何も言わず、ただ悲しそうにため息をつき、疲れた様子をしながらシャベルを使って湿った崩れやすい土をほじくり返していた。

すべてのクンブレックたちが丘の上で動きがあるのに気付き、作業を中断した。



「ネズチョークたちがオレたちのことを見てる」と誰かがつぶやいた。

「なんで今くるんだよ」と別の者の悲しげな声が聞こえてきた。

今となっては全く王族に見えないかっこうをしているフリヤームス王は、掘る手を止め、顔の土と汗をふいて、シャベルに寄りかかった。そして侵入してきた者たちをけげんそうに見つめていた。ため息をつきながら、疲れた様子で道具を地面に押し付け、肩をすぼめてネズチョークたちの様子をうかがいはじめた。クワスーリヤはその横に立っていた。

フリュップスを先頭にしてやってきたネズチョークたちは、すでに丘を降りて村に近づいていた。

「きょうだいの皆さん、こんにちは」とフリュップスが言った。「尊敬するフリヤームス様！冠を脱いでご挨拶したいところですが、もう長いこと冠が取れなくなっていて。本当のこと言うと、私は時々冠の下がものすごくかゆくなるんです。そりゃそうと、あなたの村の皆さんはまるでこれから海のクルーズ旅行にでも出発するような感じに見えますが？」

「いやいや、本当にそうなんです」と、フリヤームスは答えた。

「あなたたちの問題を私たちは解決することができます。むしろ、そのために私たちはここに来ました」

「な、なんと。恩に着ます。ありがとうございます」フリヤームスは感情を込めて答えた。

「なに、どうってことございません。これまで誤解もありましたが、私たちは家族なんだろうんです。さあさあ皆さん、頑張って手を動かそう」そう叫んだフリュップスは、王族が着るシャツの袖をまくって村に向かった。シャベルや袋を持った若者たちは、彼を追いかけた。

エネルギーに満ちあふれたネズチョーク族のみんなは、仕事を始めた。元気をもらったクンブレック族のみんなも、気合を入れ直して掘る作業を再開した。そして夕方前、川から水が噴き出す前に、なんとか水を流しだす溝を完成させることができた。そして雨が止んだ。

夕暮れ時、赤い丸の形をしている太陽に照らされながら、2つの部族は丘の中腹に立って、泥のような水流が押し寄せ、あらゆるものを押し流しながら村の周りを進んで行くのを、疲れた顔で見ている。クンブレック族の家は救われた。たそがれ時になると、ネズチョーク族とクンブレック族はお互いに祝福して、抱きしめ合ったり、肩を叩いたりし始めた。クンブレック族の中には、嬉しさのあまり涙を流す者もいた。

「これから森がかつて経験したことのないような大規模なパーティーを開かなければならん。もしそれができないならワシは王の座から降りる」ととても疲れているけれど、平和が訪れて幸せな気持ちになったフリヤームスは谷の集落の全体に向かってそう発表した。

クンブレック族はネズチョーク族のみんなを自分たちの村の中に招いて宴会をした。長いテーブルを並べて、明かりをともし始めた。焚き火とランプの光であたりは昼間のように明るくなった。

「あたし認めるわ、あんたたちそんなに悪い人じゃないってことを」マバーシャは、隣に座っていたジャンボにそう言った。

「うん、ありがとう」ジャンボは興奮した声をあげた。

「そうね、あんたもいいところがあるじゃないの」とマバーシャはフクシクのことをほめた。

近くに空席があったので、そこに兄と妹と思われる2人のクンブレックが座った。

「う、うちの子供！」という喜びに満ちた高い声が、人ごみの音をかき消すように聞こえてきた。スクラブシュカおばさんだった。

「ママ、どうしたの？」フクシクは戸惑いながらたずねた。

「ペルシーク!!!プーシャー!!!」スクラブシュカおぼさんは泣きながら、そのクンブレック族のきょうだいのことを抱きしめようと駆け寄った。何年も前、幼い頃に行方不明になったペルシクとプーシャは、森の中でクンブレック族に見つけられて、クンブレック族と一緒に暮らしていたのだった。そのきょうだいにフクシクも駆け寄って行った。それから、4匹は抱き合って歌を歌い、その様子は村中に聞こえていった。1日うちに2回目の奇跡が起きた。村の宴会は朝になって疲れたネズチョークたちやクンブレックたちが眠りにつくまで続いた。

## 第16章：人を助けること

クンブレックの村が救われたことを祝うパーティーは数日間にわたって行われた。お互いの部族がストップすることなく訪問してきて祝福を続けた。最初にクンブレックたちがネズチョークたちのところへ行き、次にネズチョークたちがクンブレックのところに行ったが、それからはみんなが全く勝手にお互いを訪問するようになった。10日もするとネズチョークの村にはネズチョークとお客にやってきたクンブレックのどちらが多いのか分からなくなった。

その時、ホムカとローザチカが再び現れた。2匹は朝霧の中から森の妖精のように現れ、手や足で草の上にたまった露をはじいて落としていた。最初、ネズチョークたちは、お祭り騒ぎが1週間半も続いたから、気のせいで見えることが増えただけなんだと考えていた。しかし、ハムスターとオウムはじっくりじっくり村に近づき、気のせいなんかではなく本当に来たのだということを証明しはじめていた。

「え、何、何が起こったんだ!？」他の者よりも早く気付いたチュポックスがそう言った。

「いやー皆さん、自分たちで来ようって決めて、また来ちゃいました」とホムカは役者のように言った。

ホムカは「僕たち疲れた旅行者が飲んでもいい水が一口でもあるといいんだけど、ある？」と尋ねるとコーヒークップに前足を伸ばした。チュポックスは深く息をして客にコーヒークップを渡した。それから新しいコーヒークップを入れに行った。

「いや、実は人間たちに悲しい出来事が起きたんだ」コーヒークップをズズズっとすすりながらホムカは報告をした。「洪水で人間たちの町の多くの家が被害を受けた。家だけじゃない、人々が『おとぎ話の博物館』と呼んでいる塔がある高い城の形をした家も被害を受けたんだ。町のほぼ全部の住民がよく訪れるところで、特に子供とか観光客なんかがよく来るんだ」

さらにローザチカはこう付け加えた「そこを運営する人間の話を聞いたわ。その施設はみんなにとってすごく大事なんだけど、今回の洪水で建物を支える大事な部分が少し壊れてしまって、『緊急事態』ってことになってしまったの。早く修理しないと、建物は倒れてしまうとか言ってたわ」。

ホムカも「今、人間たちは緊急の修理をするために町中でお金を集めているんだけど、運営している人は町のみんなからはお金なんてそんなたくさんは集まらないって考えてるんだ。だから建物は取り壊されるってことになってしまったんだ」と付け加えた。

その言葉を聞いたローザチカはこう言った「そこであたしたち『失われた宝を返し、価値あるものを

もとに戻す、偉大なるネズチョーク族』のこと、つまりあなたたちのことを思い出したのよ。あなたたちはもうずっと前から人間たちを助けてきたじゃないの。今回も助けることってできないかしら？」。

「きみたちの宝っていうのは建物を修理するお金を集めるのに十分くらいあるのかい？」とホームカが期待を込めて尋ねた。

部族は黙ってフリュップス王を見ていた。やがて老王は前に出てきた。

「われらは何年ものあいだ宝物を集めてきたし、集まったものは倉庫に保管してきた。十分な量のお宝があると思うぞ。もし、お宝の量が十分でなかったとしても、われらには人々を助けるという同じ目的を持った新しい仲間、クンブレックのみんながおる。クンブレックのみんなもわれらを助けてくれるじゃろう」とフリュップスは自信を持って言い、杖に寄りかかった。フリーアムス王も同意してうなずいた。

ネズチョーク族のみんなはこの考えに賛成で「そうだ！」「人間たちを助けよう！」といった声が聞こえてきた。しかし、修理が必要な建物がどこにあるのか、宝をどこに運ばばいいのか、誰も知らなかった。でも場所偵察の役を引き受けてくれる者たちはもちろんいた。われらがフクシク、ジャンボ、チュポックスだ。

3匹は自分たちは偵察をバリバリと上手に行えるということを見せたくてウズウズしていた。そんな気持ちを強く表していた3匹に部族のみんなは文句なしでその任務を任せることを決定した。いつ出かけるのがよいか長い間話し合ったが、最終的に偵察は昼間に行うことにした。

## 第17章：街を探検して、お宝をおとぎ話の博物館に届ける

「偵察で大事なのは変装だ！」フクシクは人差し指を立てて意味深な様子でそう言った。

フクシク、ジャンボ、チュポックスの3匹は、ネズチョーク族のみんなが持ってきた人間の服の山を見ていた。数分後、3匹は子供用の茶色のコート、はき古された青い靴、どぎつい黄色のチェックのマフラー、緑の手袋、大きな黒いシルクハットを選んだ。ネズチョークたちにとっては子供用のコートであってもそれは大きいものであった。誰かが、フクシクがチュポックスの肩の上に立ち、ジャンボはその上に登るべきだと提案した。そうやってみたら確かにコートはぴったりだった。こうやってできた人間ピラミッドならぬ「ネズチョークピラミッド」にはマフラーが結びつけられた。さらにほりだらけのシルクハットをかぶせられた。ジャンボはシルクハットの中にすっぽりと隠れてしまったので目の部分には2つの穴が開けられた。

「♪くろーいシルクハットー、ふるーいお洋服う、今日は一お祭りだからー、急いであなたの町に来たあ」と、どこかで耳にした歌詞でホームカは歌い、その衣装のことをほめてくれた。

人間というよりは畑のカカシのようなヘンテコなネズチョークピラミッドの姿に、ネズチョーク族のみんなは苦笑した。でも他に選択肢はなかった。

「変装はいまいちじゃのお、十分に気を付けるじゃぞ」とフリュップスは偵察チームのみんなに言った。

ネズチョークたちは、ホームカとローザチカを連れて街の外れまで行き、この仮装、いや変装のコス

チュームの中に入った。

ジャンボは「お前たち、そろそろ家に帰る時間だな」と言い、別れのあいさつをし始めた。

ホームカが「いやいや、こんなすごい冒険に参加しないわけにはいかない」と答えた。

「新たな冒険者ってことね・・・」とローザチカはホームカを見ながらボソボソとつぶやいたが、結局はみんなと一緒にいくことにした。

「それでは、出発！」コートの中からフクシクの声が聞こえてきた。

少し力を入れてチュボックスも「出発！」と言い、他の2匹のネズチョークとコートでできた「建物」を力強い肩に乗せて町に向かって足を進めた。

チュボックスはバランスをとるために二本の棒を持っていくことにした。さらにコートのポケットからは古いロープが見つかったので、その片方のはじっこをホームカの首輪に結び、もう片方のはじっこを棒に結びつけた。そんな感じで見た目としてはペットが散歩に連れていかれているように見えたが、ハムスターをロープに繋いで散歩するなんて、ずいぶんと変な飼い主なんじゃないだろうか。コートを着た「人間」の肩にはローザチカが座った。なかなか見ごたえのある出来栄えになった。ネズチョークピラミッドは立ち上がり一瞬立ち止まり、それから前に進んだ。ネズチョークピラミッドのみんなは数分後には朝日の中、町の石畳の上を歩いていた。通行人は少なく、コートを着てマフラーを巻き、古めかしいシルクハットをかぶったおかしい「人間」に、特に誰も興味を示さなかった。

しかし、道行く人の中にはこの古い服の「人間」を見て驚いた顔をする者もいたし、中には走って道の反対に逃げる人もいた。

そのコートを着た「人間」は、ときどき前や後ろに傾いたり左右にゆれたりしながら、ぎこちなく歩いていた。でもチュボックスが手に持っている棒をうまく使ったので、その「人間」は比較的安定して歩くことができた。

「あ、あ。マイクテスト!聞こえますか?どうぞ」ジャンボは人間ピラミッドの中で連絡をとってみた。「マイクテスト、マイクテスト!よく聞こえます!あ、あ、エンジンルームのチュボックス聞こえますか、どうぞ?」。フクシクは前もむしろ何も見えないし、さらに特にこれと言ってやることは何もなかったのだが、気分は上々だった。

チュボックスは他の2匹とたくさんの服を持ち上げて歩く役をしていたので、冗談を言っている場合じゃなかったが、聞かれたことには何か答えなければならなかった。

チュボックスは、適度なテンポで歩きながらこう質問した「あ、あ。よく聞こえます。そちらは何が見えますか?そしてどこに行けばいいですか。どうぞ。」

「エンジンルームがどこに行くべきか質問しています、どうぞ」フクシクは下から聞こえてきた質問を上流した。

ジャンボは、シルクハットの穴におでこをつけ、左右を見回した。そして下に向かってよく聞こえる声でささやいた。

「直進すると、その先に町の中央広場があります、どうぞ」

「その広場にはアイスクリームがありますか?どうぞ」チュボックスは汗をかいていたしお腹を空かせていたので、何か食べたいと思っていた。

「そうだね、少し休んで軽く何かを食べたい。なんだか疲れたわ」とホームカが言った。

チームのみんなは広場に到着した。ジャンボはシルクハットをグルグル回してアイスクリームスタンドを探した。チュボックスはアイスクリーム屋さんがいるのが分かったので、シルクハットを動かしてていねいにおじぎをした。

アイスクリームスタンドまでたどり着くとローザチカは「クレっ、クレーム・ブリュレ、ヒト、ヒトツ！」と言って注文をした。

「お客さん、あなたの小鳥ちゃんが言っているとおりでいいですか？」と、料理人のエプロンを着ているヒゲ面のアイスクリーム屋さんが戸惑いながら聞いてきた。コートを着たネズチョークピラミッドは無言でうなずいた。お金はコートの袖からポトリと落として払った。アイスクリーム屋さんは大きなコーンの白いアイスクリームを差し出した。シルクハットをかぶってコートを着ているこの奇妙な「人間」は、手が最後まで入っていない袖でアイスクリームを抱きかかえて少しわきのほうに移動した。それからクレーム・ブリュレが乗かったアイスのコーンはまるで奇跡でもおきたかのようにまず服がシワになっているところに消え入り、次にすごく短くなって出てきたかと思うと、1分後には完全に消えた。ネズチョークピラミッドを作っていた3匹が食べたのだが、もちろん外にいる「ロープにつながれて散歩をするハムスター」と「あなたの小鳥ちゃん」にも分けてあげた。「さて、おとぎ話の博物館っていう塔がついたお城っていうのは、どこにあるんだい」とチュボックスがたずねた。

「ここ、ここよ」ローザチカはそう答えると、古い城の形をした大きくて立派な建物を指差した。

大小の塔で囲われた巨大で華麗な城とそこにある色とりどりの旗、国旗、ペナントなんかみんなの目に入った。

「よし、目的地が見つかった、森に戻ろう」とフクシクは言った。そしてホムカとローザチカには、「ソフィーがおまえたちが行方不明になったことに気づく前にうちに帰っとけよ」と言った。

ホムカも「そうだな、今日はもう十分冒険をしたしな」と賛同した。

村に戻ると、ネズチョークたちは自分たちが見たことを仲間に教えた。

1時間後には、倉庫の中のすべての宝物は種類ごとに分けられ、ケースに入れられていた。ケースは積み上げられて、いくつあるか数えられていた。指輪、ネックレス、ブレスレット、ブローチ、イヤリングといった人間たちが無くしたりどこかに置き忘れたままにしたりしたアクセサリーはキラキラと光っていた。集められた宝石からのまばゆい光は目をくらませるほど強かった。クンブレックの村に使いの者が送られ、「あなたたちにも集められた宝を人間たちに届けるべき時がやってきた」というメッセージが伝えられた。

クンブレック族はすぐに到着し、2つの部族は丸一晩かけて森から町まで宝物を運んだ。緊急で修理が必要な高く美しい塔がある城、その城の大広間の中央にあった宝箱の中にすべての宝がていねいに入れられた。

それから、ネズチョークたちとクンブレックたちは、静かにそして素早く町を出た。やがて森のはずれまで来ると別れを告げ、それぞれの村に散っていった。

第18章：人間は奇跡があるということは信じるが、森の住人が助けてくれることがあるなんていうのは信じない

季節は小春日和、パパとママとお兄ちゃんのビクトルと妹のソフィーのあの家族が森のはずれで再び休暇を過ごしていた。

家族のみんながめいめいに休暇を楽しんでいた。パパは最近本当に起こった奇跡の話をした。洪水で被害を受けたおとぎ話の博物館に、突然見ず知らずの誰かから宝石類が寄付として届けられ、そこから修理費が捻出されたのだ。あまりにも不思議で神秘的な出来事だったので、新聞でも報道された。

「パパ、もしかしてこの宝物ってネズチョークが持ってきたんじゃない？」とお兄ちゃんが尋ねた。

「それともクンブレック？」妹が付け加えた。

「いやいや、そんなことはないわ」とママは子供たちを抱きしめながら答えた。

パパは「ネズチョークとかではなくってどこかの人間がやったんだろう」と答えて会話に参加した。

子供たちはまたいつものように原っぱを走り始めた。突然、ビクトルが喜びの声を上げた。

「ママ、パパ、夏になくしたトラックだ！」ビクトルはそれを拾い上げ、両親に見せた。

パパが冗談まじりに「おお。ほら見ろ、ネズチョークが隠したりしたんじゃないんだ」というとママは笑った。

夕方になった。しっかりと遊んだ子供たちと両親は車に乗り込み、町へ帰って行った。

エンジンの音が消えて車が見えなくなると、枯草の背の高い茂みからフクシク、ジャンボ、チュボックスの3匹が現れた。フクシクは車が去っていくのを見ながら、少し下がったズボンを上にあげた。「残念だなあ、オレたちがやったってことをだれも知らないんだぜ」と言って、フクシクは友人たちの方を見た。

「オレたちは森の奥に隠れる秘密のヒーローなのさ」と誇らしげにジャンボが声を上げる。

そしてチュボックスは「有名になるなんてまっぴらごめんさ」と言い、「新聞のインタビュー、サイン会、大勢のファン……面倒なことばかりじゃないか」と付け加えた。

「そうそう、ネズチョークが存在しているってことは人間にはバレないほうがいいな。少なくとも今のところは」とフクシクも賛成だった。「さあみんな、行こう。人々が無くしたお宝を探す旅だ」

ジャンボとチュボックスはそれにうなずき、これまでと同じように人間たちが休日を過ごすこの場所に何か落ちていないかを調べ始めた。フクシクはというと草の上にキャンディーが落ちているのを見つけた。包み紙から取り出して、なめ始めると思わずそのおいしさに目を細めてしまったが、友達たちにはバレないようにした。

完